

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<全文>グローバル社会における日本語のコミュニケーション：日本語を学ぶことはなぜ必要か：
国立国語研究所第6回NINJALフォーラム

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/00000913 |

国立国語研究所 第6回NINJALフォーラム

グローバル社会における 日本語のコミュニケーション

日本語を学ぶことはなぜ必要か



共通語としての英語、そして日本語 鳥飼玖美子

日本語を教えることの楽しさと難しさ 迫田久美子

道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道 莫 邦富

2050年の日本語はどうなる？ 西原鈴子

オラの愛する元気な日本・大好きな日本語 ダニエル・カール

パネルディスカッション

鳥飼玖美子／ダニエル・カール／莫 邦富

西原鈴子／迫田久美子／野田尚史(司会)

グローバル社会における 日本語のコミュニケーション

日本語を学ぶことはなぜ必要か

目次

開会の挨拶

影山 太郎 … 1

講演1 共通語としての英語、そして日本語

鳥飼玖美子 … 4

講演2 日本語を教えることの楽しさと難しさ

迫田久美子 … 10

講演3 道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道

莫 邦富 … 17

講演4 二〇五〇年の日本語はどうなる？

西原 鈴子 … 26

講演5 オラの愛する元気な日本・大好きな日本語

ダニエル・カール … 37

パネルディスカッション

鳥飼玖美子／ダニエル・カール／莫 邦富 … 44
西原 鈴子／迫田久美子／野田 尚史(司会) … 44

閉会の挨拶

迫田久美子 … 55



開会の挨拶

国立国語研究所所長 影山太郎

みなさま、よくいらつしやいました。国立国語研究所所長の影山でございます。今日は三月十日。明日三月十一日は、あの未曾有の大災害が起こってからちょうど二年目に当たりますが、被災地の復興はまだ途上でございます。私たちは、今日このような楽しい講演会を開くことができますことを幸せに感じたいと思います。

さて、大学共同利用機関になってから国立国語研究所は年に一、二度、一般市民のための公開フォーラムを開催していきまして、今回が六回目となります。本日のテーマは「グローバル社会における日本語のコミュニケーション」ということで、おそらくこういう機会であれば決して顔を合わせることもないであろうと思われる五人の多彩な講師を特別にご用意いたしました。講演の順番で紹介しますと、まず、NHKテレビの英会話でご活躍の鳥飼玖美子さん。鳥飼さんは、英語教育や異文化理解の専門家で、国際共通語としての英語や日本の小学校における英語教育についても多数の著書を出しておられます。今回のテーマが日本語のコミュニケーションであるのに、英語ご専門の鳥飼さんを先頭に持ってきた理由は、あとで分かることでしょう。次の講演者は、国語研の日本語教育研究・情報センター長の迫田久美子さんで、外国人に対する日本語教育の研究一筋でやってこられました。このお二人の総論的なお話の後、十五分の休憩をはさんで、後半はより具体的な話に移ります。今回、特別ゲストとしてお二人の外国出身の方をお招きしています。莫^モ邦富^{バンフ}さんは中国出身の経済ジャーナリスト兼作家で、中国語の入門や日中両国の相互理解などに関して多数の著書を出版されています。講演では、ご自身がどのような日本語を勉強されたかというお話が聞けるものと思います。国際交流基金日本語国際センター所長の西原鈴子さんは外国人に対する日本語教育の専門家で、アメリカ、日本、その他の国々で日本語教育を実践されてきました。そして、今日の取りをつとめていただくのが、テレビ等でお馴染み、ダニエル・カールさん。カールさんはアメリカ・カリフォルニア生まれで山形育ち、タレント、翻訳家、実業家、評論家、司会者として活躍されるほか、山形弁をこよなく愛する山形弁研究家でもいらつしやいます。そして、これらの講師をとりまとめる司会が国語研の野田尚史さん。野田さんは日本語文法および日本語教育の専門家です。



おそらく皆様は、「なんとまた多彩なメンバーだろう」、「いったいまた、なんでこんな取り合わせ？」とお思いのことでしょう。このような多彩な講師陣になったのは、「グローバル社会における日本語のコミュニケーション」という広大なテーマをできるだけ多角的に論じたいと考えたからに他なりません。今日の話の展開は、実は私も読めないところがあるのですが、おそらく、外国語と日本語という観点から迫っていくものと思います。しかしながら、コミュニケーションの問題は、実は、日本人同士の日本語の会話でも、あるいはアメリカ人同士の英語の会話でも、常に起こっています。最近、NHKが国内の企業に対し、社員の言葉遣いについてアンケートをとったところ、多くの企業人が、「上司と部下のコミュニケーションができていない」とか「新入社員は、日本語のコミュニケーション力が不足している」とかいった回答をしてきたそうです。しかしそれは会社に限ったことではありませんね。家庭の中でも、夫婦間のコミュニケーション不足で離婚が起こる、あるいは、親と子供の間のコミュニケーション不足で学校でトラブルを起こすというように、日本人の間でも「コミュニケーション力」というのがキーワードになっています。

同じことは、おそらくどの国でも、どの言語でも起こり得ることです。Deborah Tannen (デボラ・タネン) というアメリカ人の言語学者が、アメリカ人同士の英語会話を録音して分析した本が何冊か出ていまして、ひとつの事例として、こういうのがありました。

アメリカ人同士の夫婦。夫はビジネスマンで、会社ではとてもよく働き、社内での会話や、取引先との会話は非常に上手で雄弁です。パーティの席でも、常に面白い話をして、みんなが彼のそばに寄ってくる。ところが、この旦那さん、家に帰ると一変します。奥さんが「今日は、会社、どうだった？」と聞いても、「ああ、疲れた。」とか「大変だ。」とか「男は外に出れば戦場だ。」というだけで、面白い話は全然しません。奥さんは、この亭主が会社やパーティでは話し上手だということを知っているので、どうして家ではこんなにブスツとしているのか、私のことが嫌いなのか、と思ってしまう。これはアメリカ人の話ですよ。しかし日本でも同じことがよくありますねえ。

こういうことの起こる理由を、Tannenは次のように分析しました。Tannenによると、一般に男性というのは、自分の言いたいことだけを言う。事実をそのまま語るのが言語だと思っている。Tannenは、男性の言葉遣いを Report Talk (レポート・トーク) と名付けました。つまり大学のレポートのように、事実や自分の知っている知識だけを相手に伝えるということ。これに対して、女性の言葉遣いはどうでしょうか。日本では「女三人寄せ

ばかしましい」と言いますが、英語も似たようなもので、「Three women make a market(女三人寄れば、市場のようににぎやかだ)」という諺があるそうです。Tannenによれば、決して、女性がおしゃべりだということではなく、女性がしゃべる目的が、単に事実を述べるだけでなく、話し相手と親密な関係を持つ、話をする事で心と心の絆を強くする、ということらしいです。これを、TannenはRapport Talk(レポート・トーク)と呼びました。Rapportとは「相手との協調性、信頼関係、つまり絆」ということですから、女性同士が常におしゃべりをしてるのは、話の相手そのものより、むしろ、相手との関係、相手との絆を深めるためであるということになります。

そもそも、communicationという言葉は、ラテン語のcommunicare(分かち与える)という言葉から来ています。「分かち与える」というからには、「何を」分かち与えるのかという中身(コンテンツ)と、「どのように分かち与えるか」という話し方の作法が大切です。Tannenはレポート・トークとレポート・トークの違いを、男性と女性の違いと捉えたのですが、むしろコミュニケーションの中身とコミュニケーションの作法の違いと捉えるべきでしょう。話す中身と、話すときの作法(つまり、敬語が必要なのか、ため口でも良いのかといった話し方)をきちんとわきまえていけば、私たちの日常のコミュニケーションギャップも、たいていは解消できるのではないのでしょうか。今やグローバル化によって、英語が世界共通の言語になっています。日本でも、多くの企業が社内の会議で英語を使い、小学校でも英語を教えるようになってきました。また、昨今では、文学離れ、アニメブームと活字離れ、メールやブログ、ツイッターなど人工的な原因によって、若者がきちんとした日本語の文章を書けなくなっています。加えて、世界各地から外国の人たちがたくさん日本に移り住み、その人たちは、なんとか日本語を勉強して日本で生活したいと思っています。こういった状況の中で、十年後、二十年後の日本語の姿はどうなっているのでしょうか。今日の講演会は、「日本語を学ぶことはなぜ必要か」という副題が付いています。「なぜ必要か」という疑問文は、「日本語が必要である」ということを前提にしているわけですが、現在の日本語を論じるということとは、結局、日本語の将来の姿を論じることにもつながってきます。

日本語の将来をも見据えて、私たちの日本語の大切さ、日本語のおもしろさ、日本語の必要性を考えるための四時間です。どうぞ、最後までお楽しみください。

共通語としての英語、そして日本語

立教大学特任教授・NHK『ニュースで英会話』監修およびテレビ講師

鳥飼玖美子

皆様こんにちは。

本日は三十分という短い時間ではございますが、英語の視点からというより言語の視点から、少し日本語を外側から見てみたいと思います。

影山所長のご挨拶にもありましたが、本日のキーワードのグローバル社会とコミュニケーション、それと私の話がどう日本語につながるかは、これから三十分お聞きいただけるとおわかりになると思います。

グローバル社会で求められるのは英語か

グローバルゼーションといいますと、聞き飽きた言葉で、今さらなんなのだという思いもおありかもしれません。世界はグローバル化しています。グローバル化した世界のなかで日本はこれから生きていかなければならないので、コミュニケーションにとって大切なことは、なんといつても英語だ、英語をやらなければいけないということ、学国をあげて、この二十年來、英語教育も様変わりしました。コミュニケーションに使えるための英語でなければいけないということで、学習指導要領が抜本的に変わってもう二十年たちます。

そして二〇二一年に、政府はグローバル人材を育成するために推進

すべき施策として、新しい提言をしました。そのなかの大きな柱は、英語力です。ここまでできなければいけないといったことを、あらためて政府はいつています。ちよつとした会話や、海外旅行にでかけるくらいの英語は、最近の日本人はだいたいできるようになった、しかし、グループのなかで自分の意見を発表して理解してもらうようなことは、なかなかできない、そのため、もつと英語をやる必要があるということ、ますます英語教育に力がいれられているのが現状です。これはあながち否定できないところもあります。世界の共通語は、今のところは英語です。

共通語としての英語の現状

たまたま二日前(三月八日)に早稲田大学で二日間にわたって『国際共通語としての英語について』というシンポジウムが開催されました。そのシンポジウムで、外国からこられた研究者が次のようにいつていました。「これまでも共通語は世界にあった。たとえばラテン語だが、その広がりと同様で世界中の人の共通語になつてくる英語はかつてないレベルである」と。それほど英語は普遍語として世界中に広がっています。これを、「世界の英語たち」と日本語ではいいませんが、英語では“World Englishes”。そして“English as a lingua franca”「共

通語としての英語」という言い方をします。もはやそうになっていきます。今後もつとそうなります。現在、英語は母語でないのならかのかたちで使っている人たちは十六億人ほどいますが、母語話者、ネイティブ・スピーカーはたかだか四億人です。英語は母語ではないが、必要に迫られて使う人の数が圧倒的に多いわけです。それが共通語としての英語の実態です。

そうすると、英語自体が最近では変わってきていますし、変わっていかざるを得ません。つまり、ネイティブはこういうんだとか、それはネイティブの英語ではないといつても始まりません。世界の多くの国の人たちが英語を使っている以上、英語はネイティブ・スピーカーだけのもではありません。世界の人たちのものです。そのような観点に立つと、発音やリズムなど音韻面でも相当な違いが出てきつつあります。文法面でも、これまで誤りとされてきたことが、みんながいつているのだからいいでしょう、通じれば。ということにもなってきています。これが英語の現状です。

グローバル社会は多言語化する

ところで、皮肉なもので、英語さえできれば世界で通じるのかというところ、そうではありません。むしろ、グローバル化によって世界は多言語化していると、私は見えています。このことは、英語がこれだけ普遍的になってきたことに対する反発もあります。日本にいとあまり見えてきませんが、英米以外の国々、特にヨーロッパにいとよくわかります。自分たちの言語を大事にしようという気持ち各地で強くなっています。そのことに関心がないのは日本くらいです。例外的ではないでしょうか。英語がこれだけ強大な力を持って世

界を席卷しているため、これに飲み込まれて自らの言語が奪われては大変なことになるという危機感です。世界のマイナー言語を守ろうとする動きは逆に強くなっています。

もう一つは現実的な問題です。グローバル化とは、人々が自由に国境を越えて動き回るということです。実際に人間が動くときもありませんし、インターネットなどを通して情報がボーダーレスに



とりかい・くみこ

立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授(委員長)、東京大学大学院教育学研究科客員教授などを経て現職。専門は、言語コミュニケーション論、通訳学、翻訳学、英語教育学。

大阪万博、アポロ11号月面着陸など、国際舞台で活躍した同時通訳者として知られる。1971年～1992年までの約20年間、文化放送「百万人の英語」で講師を務めた。国立国語研究所日本語教育研究・情報センター客員教授、日本通訳翻訳学会元会長、国際文化学会理事、日本学術会議連携会員、文部科学省大学設置審議会委員等。

主な著書は『異文化をこえる英語』(丸善、1996年)、『歴史をかえた誤訳』(新潮社、2001年)、『危うし!小学校英語』(文芸春秋社、2006年)、『通訳者と戦後日米外交』(みすず書房、2007年)、『通訳学入門』(監訳、フランツ・ポエヒハッカー著、みすず書房、2008年)、『翻訳学入門』(監訳、ジェレミー・マンデイ著、みすず書房、2009年)、『「英語公用語」は何が問題か』(角川書店、2010年)、『国際共通語としての英語』(講談社、2011年)、『異文化コミュニケーション学への招待』(編者代表、みすず書房、2011年)、『英語の一貫教育へ向けて』(監修、東信堂、2012年)、『戦後史の中の英語と私』(みすず書房、2013年)ほか。

なることもあります。特に人間が移動する頻度と幅の広さもかつてないほどです。その結果として、私が専門にしております翻訳学、通訳学からいうと、世界各国で通訳者、翻訳者への需要がかつてなく増しています。以前は、通訳というと、会議通訳でした。今日のような立派な会議場で会議が行われると、たとえば、私が日本語で話をする、それを同時通訳者が、英語なら英語、フランス語ならフランス語に同時通訳して、それを聞く、という会議通訳が一番目立つ存在でした。しかし、考えてみると、そのような会議に出席する人はごく一部で、しかもエリートです。多くが専門分野を共有していますし、そのような人たちはたいがい英語ができますので、それほどコミュニケーションに支障をきたしません。

何が一番困るかという点、世界の人たちが自由に動いた結果として、日常生活の場で自分の言語が通じないということです。自分が動いていった先のホスト社会における言語がまだ十分でないため、いわゆるコミュニケーション通訳が最近では重要になっています。具体的に言われているのは、ときどき翻訳もはいますが、たとえば、法廷や医療、教育など、すべて日常の場です。

司法通訳というのは、たとえば、道を歩いていて警察から職務質問をされてもどうも通じないため、ではちょっと署まできてくださいといっ、あなたの言語はなんですかということで、その言語が分かる人と呼んできて取り調べの通訳をしてもらいます。これが司法通訳です。そして、その人が起訴されると、裁判になります。法廷では、誰であっても自分の母語で、自分のことを述べる、あるいは証言することが基本的な権利です。そのため、その人が話す言語の法廷通訳者が必要になります。最近、日本では法廷における通訳が急増しており、

数十カ国語が必要になっています。つまり、グローバルゼーションがもたらしたものは、英語という言語の普遍化と同時に、世界各国で通訳・翻訳が日常レベルで必要になってきたということにほかなりません。

その証拠に、三年に一度、「クリティカル・リンク」"Critical Link"という国際会議が開催されています。なくてはならないリンク、つながむものという名前をつけた国際会議です。そこでは、各国において日常的な場での通訳に携わる人たちが、各国での状況を持ち寄り、課題などを議論しあいます。これがさきほど申し上げた国際会議の場とどう違うかというと、日常の場であって、しかも医療にしても法廷にしても、その人の人生、命にかかわる非常に重い通訳をしなければならぬという現実があるということです。したがって、グローバルゼーションがもたらしたのは、世界の多言語化だと、私はあえて申し上げたいと思います。その一つの例が、日本です。

東日本大震災で表出した言語問題

日本は同質な (homogeneous) 社会だとよくいいます。これは幻想です。日本には多くの国の人たちがはいつてきて住んでいます。二〇〇九年に、日本に正規に入国した外国人は七五八万人いました。非正規、まあ違法にはいつてきた人を含めると数はもっと多いはずですが。そして、外国人登録をした方は、二〇〇九年には二百八十八万人、二〇一一年末には少し減って二百七十八万人ほどです。二〇一一年は、阪神淡路大震災のあった一九九五年の五割増しです。

東日本大震災では多言語社会の現実が表出しました。被災地には百六十カ国もの人たちが住んでいたのです。その人たちも被災しまし



た。マスコミにはあまり取り上げられていませんが、東日本大震災ではこの百六十か国からきた人たちも大変な思いをしました。もちろん、日本人と同じような大変さに加えて、情報がわからないという苦労がありました。ボランティアなどがすぐに翻訳をしたのですが、英語に翻訳するだけで何日もかかってしまいました。そして、英語から各言語に翻訳するのにまた時間がかかりました。しかも、少しでも翻訳をなさったことのある方はご存じだと思いますが、一つの言語から別の言語に訳すとき、少しズレがでます。言語である以上、仕方のないことです。違う言語なので。そうすると、英語なら英語に訳したものを違う言語、たとえば、中国語に訳すと、そこでまたズレ

がでてきます。ということ、多言語の翻訳がいかに大変なことがわかりました。それでもないよりは良いのですが、時間がかかりますし、正確な情報がなかなか伝わりません。

「やさしい日本語」の創生

そのようなことから、「やさしい日本語」を準備しておこうということになりました。つまり、NHKなどは災害のニュースはまっさきに流しますが、外国の人たちに聞いたところ、日本語が相当できる

人でも、NHKのニュースを聞いても、地震がどれくらいか、津波がどうなのかわからないと。私たちは英語をずうっと勉強していますよね。そして、相当できる人でもBBCやCNNのニュースを聞いてわかって、じゃあこうしようというわけにはいきません。しかもあの混乱で気も動転しているなかで、NHKのニュースをいくら聞いてもわからない。

その反省に基づいて、NHKも「やさしい日本語」でニュースを発信する研究を始めています。これが大変です。普通の日本語だと頭からずうっと聞いて、最後に重要な情報がきます。それを改めて、大事な情報を最初にもってくるようにして、どうでもよい情報はあとにもっていきます。とにかく、地震がどのくらい強くて、今逃げなければいけないのかどうかといった大事な情報を、やさしい日本語で発信していきます。

このことは、担当者にいわせると相当に大変なことだそうです。しかし、日本にこれだけ多くの外国人が住んでいることを考えると、すでに日本の人口総数の一七%を超えていますから、今後ますますこのような努力は重要になると思います。

また、介護の現場を見ても、経済連携協定によってインドネシアやフィリピンから来日した人たちが看護師として勤めています。この人たちは、日本人と同じように、日本の国家試験を受けて看護師の資格を取得して、なるべく日本で看護師として働きたいという希望を持ってやってくるわけです。そして、介護の現場でも評判が大変よいのです。このような人たちはこれからも増えていくでしょう。

それから、ビジネスこそ英語で大丈夫でしょうと、日本人は思いがちです。楽天だって英語、ユニクロだって英語を公用語にしているく

らいだ、と思いがちです。しかし、日本の国内の企業で外国人を採用している企業は、逆に、日本語を共通語として仕事をしたほうがはるかにうまくいくということを学び始めています。特に日本をマーケットにして、日本で仕事をする会社の場合、社内ですら英語を使用しただってマーケットは日本なのでから、外に出ていっただけなら日本語を使わなければなりません。いちいち翻訳する手間を省いて、むしろ外国人の社員に日本語をきっちり学んでもらって社内の共通語は日本語にするという試みが少しずつ増えてきているのが現状です。

このようなことを踏まえると、日本語を日本の共通語として、外国からこれらの方にも使っていたことが大事です。全員が英語ができるわけではありません。普遍語だといいますが、英語ができるのはやはり一部の人たちです。日本にいる外国人に英語ができることを求める必要はありません。むしろ、日本語をきちんと学んでいただきたい、日本語を共通語として使うことです。

グローバル社会における「コミュニケーションと言語」

そのことには実利的な意味のほかにもう一つ意味があります。外国語を学ぶということは、異文化への窓を得るということです。どんなにその国に興味と愛着があっても、その国の言語を知らなければ半分しか理解したことにはなりません。表面的なことは理解できても、深いところまでは理解できません。もちろん、お祭りや、お正月の祝い事など表層的な、目に見える文化はわかるでしょう。しかし、日本人とならんで仕事をするときにかかわってくるのはコミュニケーションであり、そのコミュニケーションを支えているのはそれぞれの文化

の価値観、信条、世界観です。これはお互いが英語を話しているだけではまったく理解することができません。日本人をほんとうに理解しようと思ったら日本語を学ぶことが必要であるということは、ダニエル・カールさんはよくご存じだろうと思います。

日本語教育の強化・推進

そのような意味では、日本語教育を、海外での日本語教育を含めて、日本人はもつと熱心にやる必要があります。もちろん国立国語研究所もやっておられますが、もつと一般社会において日本語教育に対する関心が広がってもよいと思っています。政府が今、「グローバル人材育成」ということで、英語ができる日本人を育てようとしています。それはそれで結構ですが、もう一つ、日本語ができるグローバル人材も育成したらいいか、と思います。

私の分野からいいますと、もつと数がほしいのは、外国語を母語としていて日本語をその外国語に通訳・翻訳してくれる人です。日本にいる日本の通訳者や翻訳者の多くは、特に通訳者は、両方向の訳をします。つまり、外国語から日本語、日本語から外国語へ。専門が英語なら、英語を日本語に通訳するだけでなく、日本語から英語へも通訳します。でも、ヨーロッパの規範では、外国語から母語へという一方通行が一番望ましいとされています。表現力が母語のほうが豊かだからです。ということは、日本語の通訳者をもつとふやす為には、日本人ではなく、違った言語を母語にしている人たちが日本語を学んでくられて、日本語からその外国語への通訳、翻訳をしてくれる人材が必要です。

ダニエル・カールさんも、そもそもJETプログラムで日本にいら

したんだと思います。その前は留学生ですが、JETプログラムで来日され、英語のアシスタントティーチャー、いわゆるAETをやっておられました。このようにして日本語を学んだ人もいるのです。学んだ人のなかで、その後アメリカに帰ってモントレイ国際大学院の日本語の通訳コースにはいつて日本語の通訳者になるべく勉強している方が数名います。ですから長い目で見て、日本語教育をじっくり行うことにより、その人たちがいずれ日本語と外国語との同時通訳者になってくれる、あるいは翻訳者になってくれると、いろいろな意味で日本の発信力もましますし、日本という国がもっと多層的に理解されることになります。もちろん、日本人が海外で通用するようなグローバルコミュニケーション能力を身につけることも重要ですが、それだけでなく、もう少し日本人の、文化、社会を理解してもらうためには、長い時間はかかりますが、日本語を学んでもらって世界に発信していくとよいのではないのでしょうか。それが今後ますます必要になると思

います。

どちらかというところ、日本人は、自分のことを外に対して説明することが苦手です。謙遜すぎるのか、めんどろに思うのか、「わからなけりゃ、しょうがない」みたいな態度をとりがちです。それでは、ここからのグローバル時代を生き抜くことはできません。相手にわかってもらいたい、そして相手のこともわかるように努力をし、そして、お互い違うということを認めたくえで、なんとか折り合いをつけようとする。それが日常生活でも、外交面でも今後ますます必要になると思います。そのための一つの手だてとして、日本語の重要性。これはわれわれ日本語の母語話者のなかでの日本語の重要性は今触れず、グローバル社会における日本語の重要性ということで、日本語教育の大切さを、英語専門の私がいいうのもおこがましいのですが、あらためて問題提起しておきたいと思えます。

ここで私の話はおしまいとさせていただきます。

日本語を教えることの楽しさと難しさ

国立国語研究所日本語教育研究・情報センターセンター長

迫田久美子

お早うございます。さきほど鳥飼先生は、英語教育の観点から日本語教育をご覧になって、日本語の大切さをお話しくださいました。私は長い間、日本語を教えておりましたので、学習者がどのように日本語を学ぶのかという日本語教育の観点からお話しさせていただきます。

はじめに

本日ご来場の皆様の中には、実際に日本語を教えている方もおられますが、多くの方は日本語を教えるってどういうことだろう、どのように教えるのだろうか、外国人はきちんと日本語ができるようになるのだろうかなど、いろいろな疑問をお持ちだろうと思います。そこで、本日の私の話は、よく尋ねられる四つの質問と、その答えを通して、日本語を教える楽しさと難しさをご紹介します。

まず、最初は「日本語教育と国語教育は同じですか？」という質問です。この質問は、最近あまり聞かれなくなりましたが、十年前、二十年前はよく尋ねられました。

二つ目の質問は、「外国人にとって日本語は難しいですか？」です。「外国人が日本語を習得するのは大変じゃないですか？」ともよく聞かれます。さて、どうでしょうか。

三つ目は、私自身が「日本語を教えて学んだことに、どんなことがあるのでしょうか？」という質問です。「英語ができなくても教えられるですか？」「日本語を教えて苦労することは？」など、教えることに関する質問に対して、私自身の経験からお答えします。

最後の質問は、「日本人なら誰でも日本語教師になれるのでしょうか？」です。「私でもなれますか。退職したので日本語の教師になろうかと思っているのですが、どうでしょうか？」これも多くの方から尋ねられます。

これら四つの質問とその答えを通して、日本語教育とはどんなものか、教える楽しさと難しさをご紹介します。

日本語学習者について

歴史の文献を解いてみると、日本語を教えることは、十六世紀ころにキリスト教の宣教師に対して日本人が行っていたという事実があります。しかし、実際に日本語教育、日本語教師という職業が一般社会に認められるようになるのは、かなり後のことです。鎖国以前の通訳教育や第二次大戦以前の植民地教育の日本語教育を除くと、語学教育として外国人に日本語を教える仕事は確立するのは、第二次大戦以降、日本が高度経済成長を遂げた後ではないかと思えます。

- 1983年 「留学生10万人計画」
- 2008年 「留学生30万人計画」

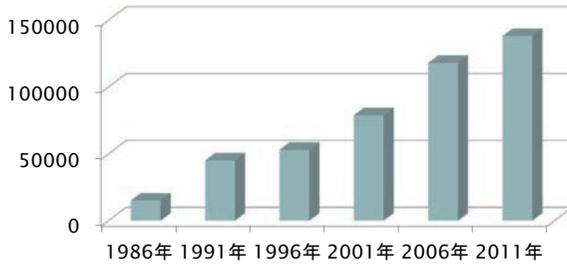
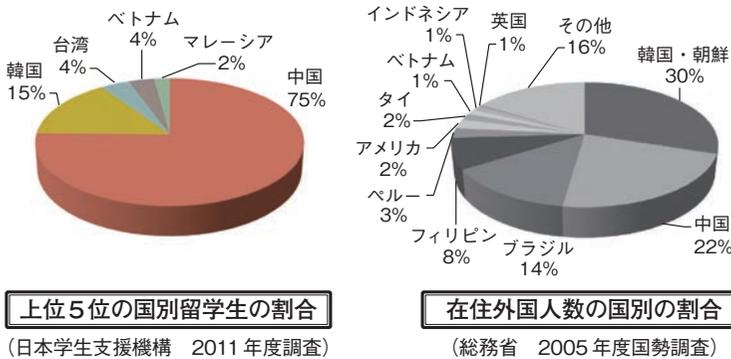


図1 日本における留学生数の推移
(日本学生支援機構 留学生数推移のグラフから抜粋)



上位5位の国別留学生の割合
(日本学生支援機構 2011年度調査)

在住外国人数の国別の割合
(総務省 2005年度国勢調査)

図2 国別の外国人の割合



さこだ・くみこ

日本語教師として務めた後、広島大学教授等を経て現職。専門は、日本語教育学、第二言語習得研究、日本語の習得、学習者コーパス、誤用分析、学習ストラテジー、言語処理、日本語教授法、シャドーイング等。
学習者の言語環境と日本語の習得過程を研究テーマとして掲げ、学習者のデータを分析しながら、第二言語習得の普遍的・個別的側面の解明を目指している。本フォーラムのコーディネーターである。
元日本語教育学会副会長、日本語教育学会国際連携委員長等。
主な著書は、『中間言語研究－日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得－』(溪水社、1998年)、『日本語学習者の文法習得』(野田尚史 他と共著、大修館書店、2001年)、『日本語教育に生かす第二言語習得研究』(アルク、2002年)、『講座 日本語教育学 第3巻 言語学習の心理』(編著、スリーエーネットワーク、2006年)、『プロフィシェンシーを育てる～真の日本語能力を求めて～』(鎌田修 他と編著、凡人社、2008年) ほか。

一九八三年に政府が「留学生十万人計画」を発表して、多くの外国人に日本に来てもらって日本語を普及しようという政策が出されました。その後一九八五年、八六年に日本の各地の大学で、日本語教育、養成を専門とする学科が設置されました。そのころから日本語教育、日本語教師という職業が認められるようになったわけです。この「留学生十万人計画」は二〇〇三年に十万人を突破して、二〇〇八年には政府からさらに「留学生三十万人計画」が出されました。そして、二

〇一年の統計では、十三万八千人の留学生が日本で学んでいます(図1)。
留学生の数が一番多い国は、二〇二一年の時点では圧倒的に中国です。そして、韓国、台湾と続きます(図2)。
では、日本国内に在住している外国人も同じような国から来ているのでしょうか。二〇〇五年度の国勢調査では、図2に示しているように、韓国、中国はありますが、そのあとの国が違っていき

二百七万八千人の外国人が日本に住んでいます。留学生上位五位の国と在住外国人の上位五位の国は順位が少し違います。在住外国人の第三位はブラジル（二四％）、第四位はフィリピン（八％）、第五位がペルー（二％）で、かれらは留学生ではなく、日本で働きながら生活をしているのです。

在住外国人の多様化

では、どんな人たちが、どのような身分で、どういう立場で日本で暮らしているのでしょうか。

留学生、研修生、あるいはJET(The Japan Exchange and Teaching Program)で来日した英語指導助手や英会話学校の先生などはすぐ頭に浮かぶかと思います。それ以外に日本企業で働くビジネスマンや工場などで働く単純労働者です。近年、さまざまな職場で、大きな労働力として活躍している就労者が多くなっています。また、就労者と一緒に来日して、家族で日本に住んでいる場合は、年少者の外国人も多くなっています。さらに昨今では、日本人男性のお嫁さんの候補として外国人の女性が多く来日しているようです。そして最近では、看護

- 留学生
- 研修生
- 語学教師
- ビジネスマン
- 就労者
- 年少者
- 外国人妻
- 看護師・介護福祉士

図3 在住外国人の多様化

師・介護福祉士といった医療や社会福祉の仕事で多くの外国の方が活躍しています(図3)。

このように、日本在住の外国人について簡単に紹介しましたが、外国人と一言でいっても、国籍、仕事、立場など多種多様です。

では、このような方々に日本語を

教える場合、どのようにしたらよいのでしょうか。

よく、「どうやって日本語を教えたらいのですか?」と尋ねられますが、では、「すぐに日本語を教えましょう」というわけにはいきません。日本語を教える前にまず大切なことは、ニーズ分析です。ニーズ分析とは、学習者を指導するために必要な情報を収集することです。たとえば、何のために日本語を学ぶのか、これまでどれだけ日本語を勉強していたか、あるいはまったく勉強していないか、現在のレベルはどのようなものかなど、いろいろ分析したうえで日本語指導を教えることをスタートさせます。

それと同時に、コースデザインが大切になります。コースデザインとは、これからどう指導していくか、指導全体の計画を立てることです。たとえば、あとどれくらい日本に滞在するのか、学習に割ける時間はどの程度か、教材・指導方法はどのようなものか、クラスでレッスンするのがよいか、個別レッスンがよいかなど、トータルで教え方を考えていく必要があります。

日本語教育と国語教育は違う?

ところで、日本語教育と国語教育とは同じでしょうか。まず、日本語教育の場合は、学習者は母語をすでに習得している方が対象となります。つまり、学習者には日本語以外の言語が存在するわけです。そして学ぶ内容は、文法や構文の知識、そしてそれらをどのように使うか、という運用力の養成が中心になります。つまり、日本語を外国語として学ぶわけです(図4)。

一方、国語教育の場合は、日本語を母語としてすでに習得している日本人を対象としています。そして、教えることは、文法ではなく、

主に文学作品の読解や鑑賞などが中心になります。このように、日本語教育と国語教育には、大きな違いがあります。一般的に、国語の先生が日本語の先生になったらよいのではないかと思われがちですが、実は日本語教育は英語教育に近いといえると思います。

外国人にとって日本語は難しい？

外国人にとって日本語は難しいでしょうか。日本語は世界の他の言語と比べて、特別難しい言語ではありませんが、ある点では、難しい部分があります。それは平仮名、カタカナ、漢字です。日本語は表記形態が複数あるため、ほかの言語より少し難しいかもしれません。たとえば、「いぬ」は平仮名で習い、次に片仮名で習い、最後に漢字がでてきます。一つの言葉に三種類の書き方があります。さらに、一つの漢字にたくさんの方があります。

| | |
|--|---|
| 日本語教育 | 国語教育 |
| <ul style="list-style-type: none"> • 学習者は母語をすでに習得している。 • 構文や運用力養成が中心。 • 日本語を外国語として学ぶ。 | <ul style="list-style-type: none"> • 学習者は日本語をすでに習得している。 • 文学作品等の読解など。 |

日本語教育は英語教育に近い？

図4 日本語教育と国語教育は違う？

- 表記形態が複数あること
いぬ/イヌ/犬
- 読み方が複数あること
「生」
 1. 生まれる
 2. 生きる
 3. 生える
 4. 生活
 5. 一生
 6. 大往生
 7. 生卵
 8. 生醤油
 9. 芝生
 10. 弥生
 11. 生粋
 12. 生贄
 13. 生憎
 14. 生業
 15. 早生
 16. 晩生

図5 外国人にとって日本語は難しい？
【漢字の存在】

皆さん少し考えてください。「生」この読み方はいくつあるかわかりになりますか。数えてみてください。

五つ以上あると思う人。
八つ以上あると思う人。

だいぶ少なくなりました。
十以上あると思う人。

正解を申し上げます。ざっとこのようになっていきます(図5)。すべてお読みになれるでしょうか。生まれる、生きる、生える、生活、一生、大往生、生卵、生醤油、芝生、弥生、生粋、生贄、生憎、生業、早生、晩生の十六です。ほんとうはもう少しありますが、残りは是非家に帰って調べていただければと思います。

このように、さまざまな漢字があることが学習困難点なのです。そのため、漢字圏の学習者は逆に、有利にはたらく場合があります。それに対して、非漢字圏、つまり漢字のない、アルファベットの母語を持つ国の人たちには難しい面があると思います。その意味では、非漢字圏の学習者は、漢字圏の学習者より日本語学習は難しい可能性が高くなります(図6)。だからといって、非漢字圏の人たちが日本語ができないわけではありません。むしろ、漢字が面白いと思って頑張っている非漢字圏の学習者もたくさんいます。今日あとお話

| |
|-------------------|
| 漢字圏学習者 |
| …漢字使用の母語を持つ学習者 |
| 例 中国語話者/韓国・朝鮮語話者 |
| 非漢字圏学習者 |
| …漢字のない母語を持つ学習者 |
| 例 中国語/韓国・朝鮮語以外の話者 |

非漢字圏学習者は、漢字圏学習者より日本語学習は難しい(可能性が高い)。

図6 外国人にとって日本語は難しい？

しになるダニエル・カールさんもそのうちのお一人です。

それ以外にも日本語学習には多くの難しい面があるのではないかと
思われますが、日本語は音韻の面、文法の面ではかの言語よりとても
難しいというわけではないので、特に問題視することは必要ありませ
んが、漢字については少し留意が必要かもしれません。

外国人にとって日本語は難しい？ 日本語の誤用

外国人たちは日本語を学ぶ過程でさまざまな誤用を生み出します。

- ① 先生、びっくり話す、ください。
- ② 姉は、ニコいます。
- ③ きのう寿司を食べた。おいしかった。
- ④ 先週、映画を見ました。とてもおもしろかったんです。
- ⑤ 花を育つ、野菜を育つ。

これらは実際の学習者の不自然な日本語ですが、正解はおわかり
になるでしょうか。①は「ゆっくり話してください」、②は「姉は二人
います」ではなくて、「My elder sister has two children」をそのまま
二子と訳したため、姉には子どもが二人いますというのを、「ニコ」と
いったのです。

それから、③の「おいしかった」は、日本人でもいいような誤用
ですが、正しくは「おいしかったです」。これは、きれいだっただ、や
すみだっただという「だった」から類推し、おいしさに「だった」をつけ
てしまったと思われる(図7)。

④は、「おもしろかったんです」は、正しくは「おもしろかった」で
すが、このように「〜んです」というのは強調だと習い「おもしろかつ
たんです」というようにいってしまった可能性があります。

| |
|--|
| (1) 先生、びっくり話す、ください。 ゆっくり話してください |
| (2) 姉はニコいます。子供が二人います My elder sister has <u>two children</u> . 2 子 |
| (3) おいしかった。おいしかった きれい → きれいだった やすみ → やすみだっただ おいしい → おいしだっただ |

図7 外国人にとって日本語は難しい？

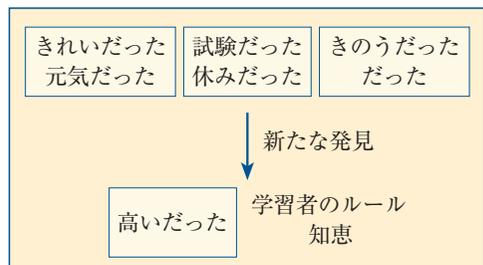


図8 日本語を教えて学んだことは？
【日本語の誤用】

そして⑤は、テレビのあるドキュメンタリーにでてきた外国人が非
常にきれいな日本語を話していたのですが、この部分が間違っていま
した。この自動詞と他動詞も学習困難点の一つです。この「おもしろ
かったんです」の「〜んです」や自他動詞は、外国人にとって上級レベル
になっても学習が難しいものです。

日本語を教えて学んだことは？

私は日本語を教えていていろいろなことを学びました。たとえば、
日本語の誤用です(図8)。さきほどご紹介した「高いだっただ」、「おい
しだっただ」は、これまで「だっただ」という言葉をよく聞くので、そこ
から学習者がルールをつくるわけです。新しい発見をするわけです。
これは、学習者は教師が教えたこととは違う彼ら自身のルールをつく
るんだという新しい発見ができました。

また、学習者の質問も教師を育ててくれます。「先生、『赤い』と『明るい』の語源は同じですか?」という質問がありました。漢字が違うので、違うのではないかと思っただけですが、調べてみたら二つの形容詞は語源が同じでした。どちらも、「アケ(明)、アカラム」という言葉からきていることがわかって、私も大きな発見をさせてもらいました。

それから、ある学生が、「先生、どうして日本人は小さい子どもに向かって『ボク、何歳?』と聞くんですか。『おじちゃん自分の歳わからないの』と思われませんか。なぜ、『君、何歳?』って聞かないんですか?」といわれたんです。これも調べたところ、日本の人は幼い子ども立場に立って話そうとする共感的同一化という原理が働いている、つまり、幼い子の立場になって、答えやすいように聞くという原理があるそうです。このように、私自身、教えることを通して多くの新たな発見をしました。

日本人なら日本語教師になれる?

最後の質問です。日本人は、ほんとうに日本語の教師にふさわしいのでしょうか。私は、そうではないと思います。話せることと、教えることは違います。日本人は無意識に日本語を習得していますので、日本語を体系的に教えることが難しいのです。たとえば、「あげる／もらう／くれる」を外国人にわかりやすく教えられるかというところではありません。「くれる」にあたる言葉が、他の多くの言語にはないのです。「あげる／もらう」は容易にわかります(図9)。しかし、「誕生日に太郎は私に本をくれました」これは正しいのですが、「誕生日に太郎は花子に本をくれました」は、正しいといえるでしょう

か。どうでしょうか。花子が身内の人なら、いいのですが、そうでない場合は不自然です。こういうことを正確に教えるためには、私たち教える側の日本人も日本語を勉強しなければなりません。

「病気で休んだので、友人がご飯を作った」。これは正しいでしょうか。「友人がご飯を作ってくれた」のほうが自然な表現ではないでしょうか。

また、「先生、カバンを持ってさしあげましょうか?」という言い方は、どうでしょうか。できれば、「カバンをお持ちしましょう」のほうがよいのではないのでしょうか。このように、私たちは日本語を客観的に学ぶことが必要なのです。

日本語を学ぶのと、教えるのと

学習者の声を二人ご紹介します(図10)。

ある学習者は、「私は日本の文字は必要ありません。ローマ字で勉強すればいいって思っていました。でも、実際に平仮名を勉強して、日本文化の見方が変わりました」と言っていました。また、「私は尊敬する人は日本にいないから、敬語はいらない」と言っていた学生もいましたが、日本で生活して敬語を学ぶことの必要性がわかったそうです。

「教える」ためには、日本人も日本語を学習することが必要。

- あげる ○誕生日に太郎は花子に本をあげました。
- もらう ○誕生日に花子は太郎に本をもらいました。
- くれる ○誕生日に太郎は私に本をくれました。
?誕生日に太郎は花子に本をくれました。

図9 日本人なら日本語教師になれる?
【日本語教師のための学習】

さまざまな日本語学習者の声

「初めはローマ字で学習。漢字や平仮名を勉強して、日本文化の見方が広がりました。今は俳句や陶芸に挑戦しています」

「尊敬する人は日本にいないから、敬語は勉強しなくてもいいと思ったが、生活のいろいろな所で敬語表現が使われていた」

さまざまな日本語教師の声

「日本語指導を通して、日本の言語・文化のみならず、政治・経済なども含めて、勉強することの重要性を学んでいる」

「日本語を教えることは学習者の母語を奪うことではない。学習者の母語・母文化を尊重し、認め合うことの大切さを実感」

図10 日本語を学ぶこと、教えることから

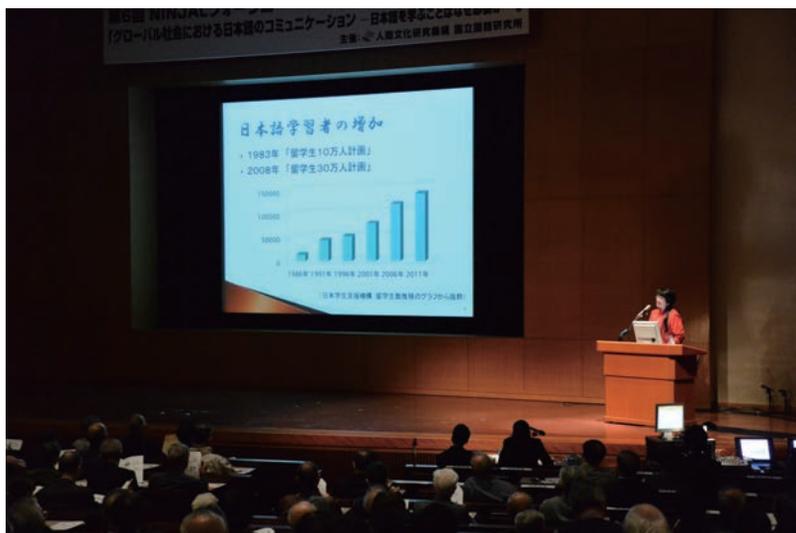
最後に、日本語教師からの声をご紹介します。「日本語の指導を通して、日本の言語・文化だけのみならず、政治・経済などを含めて、勉強することが重要だと思えます」、「日本語を教えることは学習者の母語を奪うことではありません。学習者の母語・母文化を尊重し、認め合うことの大切さを実感しています」。

日本語を教えることの楽しさは、私たちが日本語を客観的に見るとを学び、日本語や日本文化の新たな発見ができることにあります。それと同時に、日本語を教えることの難しさも認識しなければなりません。日本人だからといって簡単に日本語を教えられるわけではないのです。日本語を教えるためには、日本語を体系的に学び、学習者の立場に立って教えることが必要だと思います。

本日のお話は、これで終わりです。ご清聴、ありがとうございます。

参考文献

- ・追田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- ・総務省統計局・政策統括官・統計研修所(2008)『平成17年度 国勢調査外国人に関する特別集計結果』
- ・寺村秀夫(2007)『ケーススタディ 日本文法』おうふう
- ・独立行政法人日本学生支援機構(2012)『平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果』
- ・『日本語源広辞典』増補版(2012) ミネルヴァ書房



(スペイン)、佳木斯(チャームス)あたりで松花江、ウスリー江に囲まれる三江平野と呼ばれる一帯です。図1の写眞は、おそらく日本では初公開で、十六歳の自分を見て、これだけの年月がすぎさつていったものだ。

黒竜江省で何をしていたのかというと、荒野を開墾しながら食糧をつくと同時に、旧ソ連との国境で領土紛争が起こっていたので軍事衝突に備えるということで国境の土地に送り込まれたのです。その後、図2に示すようなきれいな田畑になりましたが、大変な苦勞をしました。

日本との出会いはこの黒竜江省です。黒竜江省でトラクターに乗って荒野を開墾していたある日、トラクターがものすごくリズミカルに振動していたのを感じて、おかしいなと思い、降りて鋤で掘り起こした土の断面を見ると、等間隔の波状にうっているのに気づきました。そこは堆積平野の荒野だったので、等間隔の波状を見て、機械で耕した跡ではないかと思ったのです。しかし、荒野と耕された跡という相反する現象が、自分には理解できませんでした。いろいろな人を訪問して尋ねて確認して、ようやくわかりました。そこは、昔、日本の開拓団がいたところだったので。それが私の日本との最初の出会いです。

そこに日中国交正常化のニュースがとんできました。当時、野良仕事をしながらマスメディアの記者のような仕事もしていたので、理屈上は日中国交正常化が非常に大きなニュースであることはわかっていたのですが、日常生活的には、まるで月の上で何か起こっているようなことで、俺とは全然関係ないというように認識していました。その後、まさか自分の人生が日本と結びつくとは、当時は想像もできませんでした。

んでした。

外国語の学習……未知の世界への憧れ

こういった苦勞をしたなかで、今写真にすると開墾された大平野はともきれいですが、当時の苦勞は大変なものでした。最初のころは機械もなかったもので、全部、鎌で収穫していました。広大な土地だから、田畑のこちら側から朝から刈り入れを始めて向こうに着いたときには、日が暮れていました。そのため、帰りには腰をまっすぐにするのができなくなりました。ですから、夜宿舎に戻っても、腰を曲げたままの格好で食事をしました。そういうことでさせられていたのです。

そのなかで、自分は詩人になりたい、詩を書こうと思っていました。すでに詩などを発表していて、詩集もだしていました。その当時、やや早熟だったのか、私が思ったことは、詩を書けるのは若い世代、感受性が豊かな時代の特権で、やがて年をとって詩が書けなくなるのじゃないか。それではどうすればいいのかという考えをいつたところ、やっぱり外国語を勉強しなければならないと思うようになりました。

外国語を勉強するようになったことは、やっぱり黒竜江省に配置されたことと大きく関連していました。当時、旧ソ連との国境の一番近いところでは、冬、川が凍結して川幅がものすごく狭くなっていて、岸壁を力強くけると、その反動で向こうまで滑っていけそうな感じでした。もちろんそんなことはできません。文革中ですから、そんなことしたら、まず銃殺されてしまいます。国境の川のだ真ん中にまるで見えない壁がそびえたっていたような状況でした。しかし、人間は、



1970年5月から74年7月まで黒竜江に下放。松花江、黒竜江、ウスリー江に囲まれる一帯は三江平野と呼ばれるが、「北大荒」という異称で知られる。そこで多感な青春時代を5年近く送った。おかげで、いまでも時々、夢の中で松花江や黒竜江の波の音が聞こえてくる。

図1

「黒竜江省の夏は版画のような世界だ。色は単純で明るい。地の果てまで続く麦畑は収穫期が近づくと金色に輝き、空は透き通るように青い。木々の緑が目にしみる。点々と見える兵団宿舎の赤いレンガがこの版画の世界に人間の息吹を感じさせる。いつか妻や娘に見せてやりたい、私の青春時代の原風景だ」

— 2006年5月20日付朝日新聞 mo@china より



図2

やっではいけないといわれると、よけいにやりたくなくなるわけです。壁の向こうを見てはいけないといわれても、かたちな壁に遮られている向こうを見たいという気持ちが逆によけいに強くなりました。壁を越えて向こうにいくと、もう一つの世界があるのではないかと思つて、向こうの世界を知るためには外国語を勉強する必要もある、とも自然に思うようになりました。

当時、農村でこんなこともありました。反革命分子として、中国の外交部のロシア語の通訳だった人が、ロシア語ができるという理由だけでスパイとみなされ、労働改造のために送り込まれてきました。私が彼の監視役だったのです。

ある日、彼と一緒に羊を放牧しにいきました。彼との会話のなかでいろいろと刺激を受けました(図3)。もつといろいろ勉強しなければいけない。文革はいつまでも続くはずはないだろうとつよく思いました。一九七三年の年が明けてから私は上海に帰省しました。

日本語の音

詩を書いていたので本屋に詩集を買いにいったとき、本屋の入り口に、表紙がブルーの本が山と積まれているのを見てビックリしました。文革中にそんな色の表紙の本はほとんどありませんでした。何の本だろうと思つて手に取つたら、日本語のラジオ講座のテキストでした。そのテキストを開けてみると、五十音図があつて、ひらがなの「あいうえお」などはわけのわからない奇妙な符号にしか見えなかったのですが、その符号の下にローマ字表記で「a、i、u、e、o」と書かれているのを見ました。母音が五つしかないのを見て不思議に思いました。日本人も恋愛するでしょう。失恋することも

きつとあるだろうと。怒るとき、悲しむとき、自分の感情をいろいろ表現しなければならぬわけですが、五つの母音で表現しきれぬのだろうか。そこは詩人的な発想になつて、韻を踏むとき五つだと単調すぎるのではないかとよけいな心配までしました(図4)。

もともと外国語を勉強しようかと思つていたのを思い出して、そうだ日本語を勉強すればいいのではないかとその時、ひらめきました。今まで敵国語だったので学習者があまりいませんでした。ライバルがあまりいないわけです。今勉強すれば希少価値もきつとでてくるだろうとも思いました。結局、その日は詩集を買わずに日本語のラジオ講座のテキストを買つて帰りました。

この本を見たとき、もう一つおもしろかったことがあります。平仮名とかわけのわからない表示があつて、それは読めないのですが、ローマ字がついたので、それなりに読めました。文革中の本ですから、革命的な言葉が一杯でてきます。「赤旗」という単語が例にでてきて、漢字を見ると、中国では「紅旗」ですが、「akahata」とローマ字で書いてあります。紅も赤いということですから、少し工夫すれば別に苦労もせずに覚えられるだろうと喜んでいました。また、ローマ字を見ると、「a、ka、sa、ta、na」と全部アが入っているし、簡単に読めます。こんな簡単な発音の言葉なら、そんなに苦労せずに日本語を覚えられるだろうと短絡に興奮していました(図5)。

それでラジオ講座を勉強し始めて、夕行のところまで勉強しかけたところで休暇が全部終わりました。黒竜江省へ帰らなければならぬので、上海中を探して一番高級なトランジスタラジオを買つて、ラジオ講座を勉強しようと思つて黒竜江省に帰りました。

上海外国語大学で日本語を専攻

やっぱり心配が的中していた。黒竜江省に着いてチェックしてみた
ら、上海の電波が心配していた通り受信できませんでした。受信で
きていたのは、旧ソ連とか韓国とか海外の電波です。文革中ですから
海外のラジオを受信していると、反革命分子の現行犯として逮捕さ
れます。それではまずいと思って、当時まだ電気がないため灯油を燃
やした照明の下で勉強するのですが、灯油の煙で鼻が真っ黒になっ
てしまっ、それではだめだと諦めました。むしろ朝早く起きて、だん
だん露がでてくる季節になるので、蚊も飛べない。それで朝早く起き
て勉強するように作戦を変えました。ナ行とかマ行を全部勉強して、
「ヤユヨ」のところにくると発音の自信がなくなりました。独学する

のは限界だと思い、大学にいかうと決意しました。そのあとは運よく
一九七四年に上海外国語大学にはいつて日本語を勉強することになっ
たのです。
ただし、我が家では、お袋が、てっきり私は詩人になるだろうと思
い、作家になることを夢みていました。そうしたら、息子の私はわけ
のわからない外国語を勉強しはじめて、しかもよりにもよって、かつ
ての敵国の日本語を勉強するなんて、親からみれば、私の人生は日本
語に誘惑されたようなものです。お袋は最初から、猛烈に反対してい
ました。でも、私は、それは関係ないじゃないか、戦争時代の問題は
すでにすぎさっているし、日本は世界二位の経済大国です。しかも今
勉強すれば希少価値もあるだろうと、いろいろ親と議論して、最終的
には今のような道を歩むことを動揺しませんでした。

詩人を目指したが、国境の川・黒竜江→国境という壁→未知の世界への憧れ→外国語を学ぼうと目覚める。

「ふと、文化大革命の時代に下放され、黒竜江のほとりで経験したことを思い出した。外交部の通訳が、ロシア語ができるという理由だけでスパイとみなされ、労働改造のために送られてきた。私が彼の監視役だった。

ある日、2人で羊の放牧にでかけた。休憩時間に川辺で、ソ連はどんな国ですか、と質問した。私に悪意がないと理解した彼はロシア文学と美術を語った。川の向こうを見つめた目の奥に、何か光るものがあった。一方、私を見る目の余光には、ある種の哀れみがにじんでいた。それを読み取った私はかすかに狼狽した。将来、私も国境を超える知識の翼をつけたい。心の中でそう誓った。それが後に外国語を勉強する動機の一つになった」

－朝日新聞mo@china(07年10月20日)

図3

テキストを開けてみた。50音図がある。ひらがなの「あいうえお」などはわけのわからぬ奇妙な符号にしか見えない。だが、その符号の下にあるローマ字表記は読めると思った。a, i, u, e, o……すぐ読めたので、かえって不思議になった。

日本語はこれほど簡単でわずかに5つしかない母音を使って構成された言語なのか。人間の豊かな感情を現わすのに必要なたくさんの言葉を、日本人はどうやって作り上げたのだろう。この母音の少ない日本語を使って愛という繊細かつ微妙で豊かな感情を若い女性は どうやって吐露するのだろう。詩人は詩を書く時どうやって韻を踏むのだろう……

図4

「テキストをめくりながら、想像はどんどん思わぬ方向へ飛んでいく。

文化大革命時代のテキストらしく、赤旗という単語が例に出ている。akahata、と、ローマ字表記を見ながら声を小さく出して読んでみた。その耳慣れない音の響きに、ある新鮮な喜びを感じた。未知のものへの想像に煽りたてられた興奮に快い陶酔感を覚えた。

夏の夜空にちりばめられた星座に、はじめて天文望遠鏡を向けて覗いた時の興奮と陶酔感に似た喜びである」

図5

辞書のなかった日本語学習

しかし、文革中に日本語を勉強することは非常に大変でした。私は卒業するまで日本語の辞書を持っていませんでした。買おうと思っても出版されていないのです。出版されている本は毛沢東選集といった政治関係の本ばかりでした。大事な日本語の辞書はありませんでした。ですから、大学時代は、夕食が終わったらいち早く閲覧室にいて、図書館にある十冊足らずの辞書を仲間と争いながら確保しなければなりませんでした。

また、文革中、日本語専攻の学生なのに日本で出版された本でも指定されたもの以外は読むではいけないということでした。そこで密かに、うちの大学に教えにこられた日本人の先生に文庫本を借りました。しかし、全寮制ですから昼間は本を読む時間はありません。夜、消灯後、トイレにいきました。トイレの豆電球ですから照度が足りない、そこで少しでも豆電球に近づこうと、洗面所のテーブルをトイレにひっぱってきて、机の上に椅子を乗せて、それによじ登って読みました。最初に読んだ小説が、横溝正史の『悪魔が来たりて笛を吹く』でした。読んだあとつくづく感じたことは、あのような小説は深夜のトイレのなかで読むべきでなかったと思いました。その本を開けると、最初に読むのをやめたほうがいいとすすめるといった内容が書かれています。「怖い話ですよ、夜読むのはやめなさい」というような内容です。しかし、逆説的に言うとうと、あの環境の中で読むと、そのスリル性が数倍も数十倍も増えてきます。

もう一つ怖かったことがあります(図6)。こういう外国の本を読んでいるところを誰かに目撃されて、学校の幹部に知らされたら、た

深夜のトイレの中で読んだ日本の小説。「文革時代、日本語専攻の私たちは指定されたもの以外、日本で出版された小説や新聞などの刊行物を読んではいけないことになっていた。

私が最初に日本の小説を読んだ場所は、深夜の男子寮のトイレの中だった。暗い照明に少しでも近づこうとして、机の上にはすを載せてそこによじ登り、トイレの臭気に我慢しながら、無我夢中で読んだ。

それは日本人の先生からひそかに借りた横溝正史の『悪魔が来りて笛を吹く』の文庫本だった。トイレを利用する同級生に怪しまれないよう、日本語教科書の中に小説を挟んで読んだ。

しかし、ばれた時の危険さから来る緊張のせいか、廊下から足音が聞こえるたびに、悪魔が本当に現れたかのような錯覚に襲われ、びくびくした」

—朝日新聞mo@china
(08年5月10日)より



図6 『悪魔が来たりて笛を吹く』横溝正史(角川文庫)

ぶん私の政治人生はそこで一発で終わります。幸いなことに、文庫本ですからサイズが小さい。当時の私たちの日本語の教科書は、自分でガリ版でつくったものですから非常に大きく、日本でいうとA3を畳んだような感じのものです。その中に文庫本を入れて、外から見ると、私はよじ登って日本語の教科書を一生懸命読んでいるように見える。他のクラスの学生たちもみんな深夜トイレを利用するから、みんな感心しているのです。「莫さん、すごいですね。こんなに勉強しているんですか」と。

『悪魔が来たりて笛を吹く』を読み終えて、この本を同じ寮のもう一人に貸すわけです。六人だったんで、一週間、交代で、当番のように本を勉強しました。そのおかげで、うちの寮の評判がものすごくよ

日本語との、道草のような偶然とも言える出会いに、詩人になろうという私の人生設計は完全に乱され、日本語、そして日本と泣き笑いをともにする人生の道を歩み始めた。この行動が後になって自分の人生をどれほど変えてしまうのか、その時は予想だにしていなかった。

もうひとつの誤算は、詩を訳せなかったことだ。島崎藤村の『若菜集』が好きで、翻訳しようと思っていたが、どうしてもあの情熱のかつりズミカルな情調を醸し出せず、苦しんでいた。松尾芭蕉の俳句「古池や 蛙 (かわず) 飛び込む 水の音」も五・七・五の音節ではなかなかうまく訳せない。



図7 『若菜集』島崎藤村(日本図書センター)

大学を卒業するまで日本語辞書を持ってなかった。それを知った山崎豊子さんは、のちに訪中する時、「新明解国語辞典」を持ってきてくださった。辞書のない苦しみをいやというほど体験したから、のちに辞書、用例集作りへの情熱につながった。

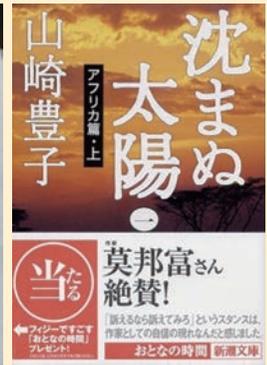
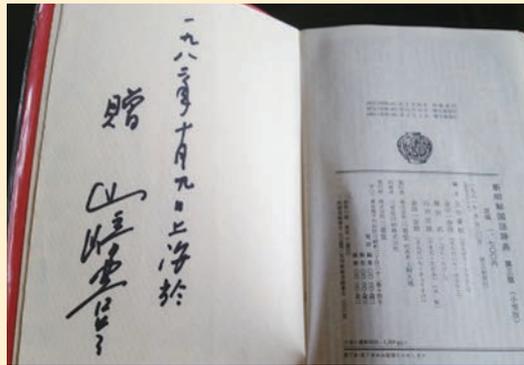


図8 『沈まぬ太陽(1) アフリカ篇(上)』山崎豊子(新潮文庫)

かった。あの寮の人たちはものすごく勉強している、徹夜で教科書を読んでいるともっぱらの噂でした。それで読み終わった本を先生に返して、また新しい本を借りてきました。松本清張の『点と線』、『黒い画集』とか。そういうなかで勉強してきました。

日本語学習の誤算

日本語を勉強する、もう一つの大きな動機がありました。詩を書けるのは若いころの特権で、やがては書けなくなるだろうと思いますが、詩を書くテクニクは年齢とともに円熟してくるわけです。そうすると、外国語を勉強すれば、詩を翻訳できるのではないかと最初に思っていました。

実際に日本語を勉強して、私が非常に好きな詩集は島崎藤村の『若菜集』です。卒業してから、いよいよ自分の目的を達成するために翻訳しようと思つて、半年間、『若菜集』の自分の好きだったいくつかの詩を何度も何度も訳してみました。どうしても、できたものが気に入らませんでした。最終的には、自分の気力を思い知らされてあきらめてしまいました(図7)。今まで日本の詩を本格的に訳したことはありません。そういう意味では日本語を勉強した動機が不純だったため、本当の目標は達成できませんでした。

一方、大学を卒業するまで辞書のない環境のなかで日本語を勉強したことは、逆に、辞書のない外国語学習の

苦しさ、難しさをいやというほど知ったので、辞書作りにもものすごく積極的になりました。私がいまだに辞書を持っていないかったことを知った日本の友人たちが、いろいろな辞書を送ってくれました(図8)。たとえば、山崎豊子さんなどが。そういうかたちでいろいろな交流させていただいています。

大学を卒業した後、やはり世界文学大辞典とか日本に来てから中国語のインターネット用語集、企業ブランド名辞典などいろいろの本をつくったりしました(図9)。そもそもその動機は、辞書のなかった経験からきたものです。

日本語を学習することだけが難しかったわけではありません。当時、日本語を学ぶことを通して得た情報などを発信することも難しかった。せっかく改革・開放時代になって、いろいろな日本の研究などができるようになったとしても、外国文学の動きを報道するのも、当時、中国では内部刊行物にかぎっていたため公に発表することができませんでした。しかし、こうした環境の中でもめげずに自分なりにいろいろとやってきました。たとえば、『君の名は』を翻訳しました。最初雑誌に掲載されたもので、ものすごく売れました。数回も増刷して七十五万部くらい増刷したそうですが、出版社が五十万部で上に報告するのをやめました。こんなにたくさん刷られていることが共産党の宣伝部に知られると、私たちに不都合があるということ、五十万部しか刷っていないといいながら、すでに七十五万部刷っていました。ただし、残念なことに、あときは中国はまだ印税制ではなく、原稿料制でした。一冊しか刷らなくても百万冊刷っても私の



図9 左：『中国語インターネット用語集 一日英中対照』(ジャパントイムズ)、右：『日・中・英 企業・ブランド名辞典』(日本経済新聞社)

収入は同じでした。

その後、日本に来て、このような本(図10)を書いていきます。語学関係のものでは、図11、12に示しています。

日本語を学ぶこと ハードからソフトへ

最後に私がいいたいことは、今日ここで、私の日本語を勉強するいきさつを教えることではありません。苦しい、厳しい環境のなかで、いかに自分が努力して日本語を勉強してきたかをいうのではありません。なぜ、ここまで苦勞をいとわずに日本語を勉強したのかというと、あのころの日本は輝いていたからです。日本語学習を通して日本のいろいろなことを知りたかったのです。学びたかったのです。一九七八年から始まった中国の改革開放時代は、じつは隠されたスローガンがあったわけです。それはなんなのかというと、日本に学ば



図10 『中国人から見た不思議な日本語』
左：河出書房新社1998年版、
右：日経ビジネス人文庫2002年版

日本は周りを海に囲まれた海洋国家、中国は狩猟民族の打ち立てた牧畜国家。日本語の魚や魚卵の名前の豊富さが独特である一方、中国語の牛、馬、羊などの家畜の部位の多さは、日本人の想像以上です。

本書は、中国語を母国語とする著者が、日本人も知らない日本語を駆使して、言語の奥行き、広さの面白さを縦横無尽に語った一冊です。



図11 『鯛と羊—日本と中国、食から見る文化の醍醐味』(海竜社)



図12 左：『21世紀の大国 中国を読む「新語」』(NHK出版)、右：朝日新聞出の連載コラムをまとめた『日中「アジア・トップ」への条件』(朝日新書)

うということでした。当時の学ぶ対象は、ある意味では、ハード的なものでした。ハードという視点から日本を学ぼうというわけです。これは、宝山製鉄所や中国版新幹線に象徴されたものでした。その二つの象徴的なプロジェクトでハードの面から日本に学ぶ時代はそろそろ一段落します。これからは、ソフトの時代です。二〇〇四年ころから中国で講演するとき強調しているのですが、私たち中国人はもう一度、日本に学ぼうというスローガンを大きく叫ぶべきだと私は主張しています。ただ今度はハード的なものよりも、ソフト的なものを念頭に置いています。日本の進んだところ、たとえば、環境汚染に対するいろいろの退治措置とか環境を保護する方法、社会システム、たと

えば年金制度などのソフトなところを学ぶべきだと思います。一方、日本の皆さんも、新しい課題を突きつけられていると思います。中国人から見れば、日本のハード的なところを学ぶときは、かたががありました。うちの家内が日本に八一年にはじめて訪問して、日本のカラーテレビを持ち帰りました。うちの団地では最初のカラーテレビでした。それをみんな見て、日本はすごいといっているわけです。かたががあるものです。しかし、ソフトの時代になると、かたががないんです。この魅力を、日本人のことを多少知っている外国人の私たちも一生懸命アピールする必要があるのですが、日本の皆さんも、もつと上手に日本の持っているソフト的な面をアピールしないといけないと思います。その意味では、本日のこの講演は、ソフトの

面から日本の魅力をどうアピールするかというテーマが、隠し味になっていっているのではないかと思います。所詮私は道草をくうかたちで日本語を勉強したものですから、本日この壇上で話す内容も道草的なものでした。ご清聴ありがとうございました。

二〇五〇年の日本語はどうなる？

国際交流基金日本語国際センター所長

西原鈴子

私は、『二〇五〇年の日本語はどうなる？』というタイトルで、皆様方と一緒に考えてみたいと思います。

二一世紀半ばを予測して、四つの観点から考えたいと思います(図1)。初めに、二〇五〇年の日本社会はどのように予測されているか、次に、そのことは日本語社会にどんな影響を与えるのか、三番目は、そのとき、日本語そのものはどのように変わっていくかを予測してみます。それを見据えて、最後に、今から私たちはどうしたらよいか、どういうことに心掛けたらよいか考えてみたいと思います。

日本の人口構成と未来像

二〇五〇年の日本の人口構成の未来像を図2にお示しします。その図の左側は、今から八年前の平成一七(二〇〇五)年の日本の人口です。ここにおられる方の多くは、中学校、高等学校の社会科で、裾野をひいた富士山のような人口構成図を目にされていると思います。四十年前の日本はややそうでしたが、二〇〇五年ころには、六十五歳以上の人口が五人に一人(二〇・二%)となり、十五歳から六十四歳の生産年齢、ひらたくいえば働いて税金を払える人が、六六・二%、十四歳以下の幼児・児童の割合は一三八%でした。そして、二〇五〇年からさらに五年あとの状況ですが、そのころ、

図1 概要

- (1) 2050年に予測されていること
- (2) 日本語社会が受ける影響
- (3) 日本語はどう変わる？
- (4) 今から心がけること

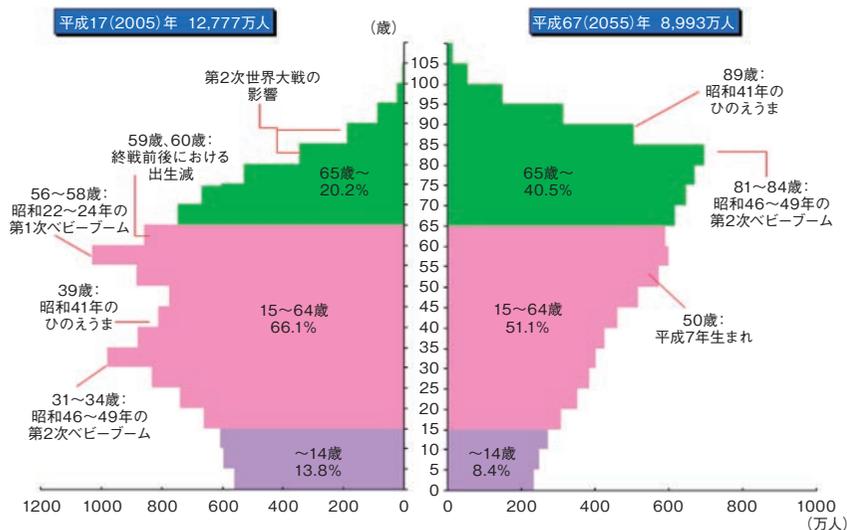


図2 日本の人口構成と未来像

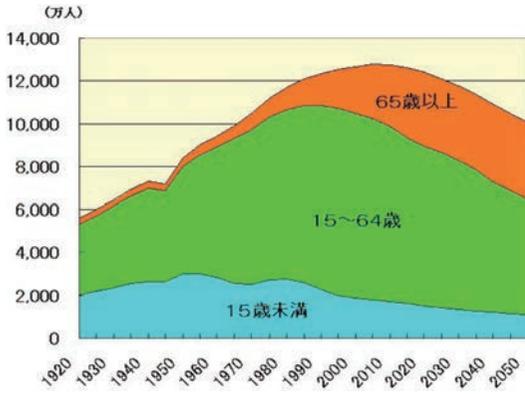


図3 日本の人口構成と未来像

人口の四〇・五%が六十五歳以上になります(図2)。これは年金をもらって働かない人たちです。その時代に十五歳から六十四歳の人口は五一・二%、十四歳以下はもっと減って八・四%となります。これを横にしてみると図3のようになります。この場合、最終点は二〇五〇年ですが、六十五歳以上の人の割合は二〇一〇年ころから変わりませんが、十五歳から六十四歳が大幅に減り、十五歳未満もどんどん減っていくこととなります。

その社会的な影響は、図4のようになります。一番左のグラフが二〇〇〇年、真ん中は二〇二五年、そして二〇五〇年には右端のグラフのようになるでしょう。これは、生産年齢が年寄りを支えているという図です。これを比喩的にみえていくと、今は三・六人の働き手が、一人の高齢者を養っていますが、二〇二五年になると、一・八人で一人

を養い、二〇五〇年になると一・二人で一人の高齢者を養う時代になります。一人で一人を養う状態に近くなっていくわけです。この会場には、そこまで生産年齢ではない方、もらう立場になっている方、そこまでは生きていない方などいろいろいらっしやると思います。その時に下で支えている人の重荷を考えると、

これは半端な所得税ではなからうと思われれます。二〇五〇年の日本の社会は、このようになると予想されているのです。

年齢別未婚率の推移

では、どうやって生産年齢人口を増やし、子どもを増やせばよいのでしょうか。

さきほどの図4から考えると、十五歳未満も、十五歳から六十四



にしはら・すずこ

米国、インドネシア、オーストラリアで日本語教育実践をした後、国立国語研究所、東京女子大学勤務を経て、2012年4月より現職。2008年より2013年にかけて、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会において「生活者としての外国人に対する日本語教育」のカリキュラム案、教材例、能力評価、指導力評価などの検討に従事した。

現在は、日本語を母語としない海外日本語教師を招聘して研修を行う機関に所属している。

主な著書は、『外国人の子どものための日本語 こどものほんご 第1巻』(監修、ひょうご日本語教師連絡会議子どもの日本語研究会 著、兵庫県国際交流協会 協力、スリーエーネットワーク、2002年)、『外国人の子どものための日本語 こどものほんご 第2巻』(監修、ひょうご日本語教師連絡会議子どもの日本語研究会 著、兵庫県国際交流協会 協力、スリーエーネットワーク、2002年)、『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』(西郡仁朗と共編著、ひつじ書房、2008年)、『言語と社会・教育シリーズ朝倉<言語の可能性>8』(編著、中島平三 監修、朝倉書店、2010年) ほか。

歳も増えていけばよいわけですが、そのことに関してはあまり希望的なことは言えません。図5は、左上が二〇〇五年の男性の未婚率を示しています。二十五歳から二十九歳の男性未婚率が七割です。つまり、二十五歳から二十九歳の男性の十人のうち結婚している人は三人

だけということ。女性は、二十五歳から二十九歳の人のうち結婚している人が十人のうち四人ということになっています。結婚年齢が上がれば上がるほど出産率は下がってきます。二〇五〇年までの子ども人口の動きは、図5の下のグラフのようになります。

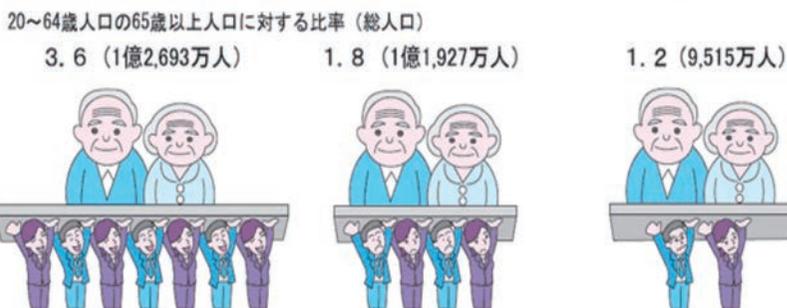
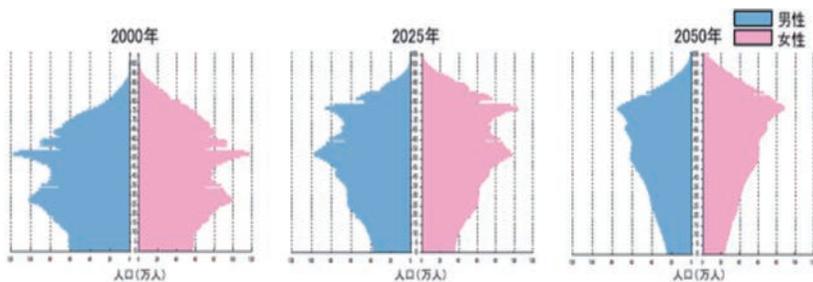
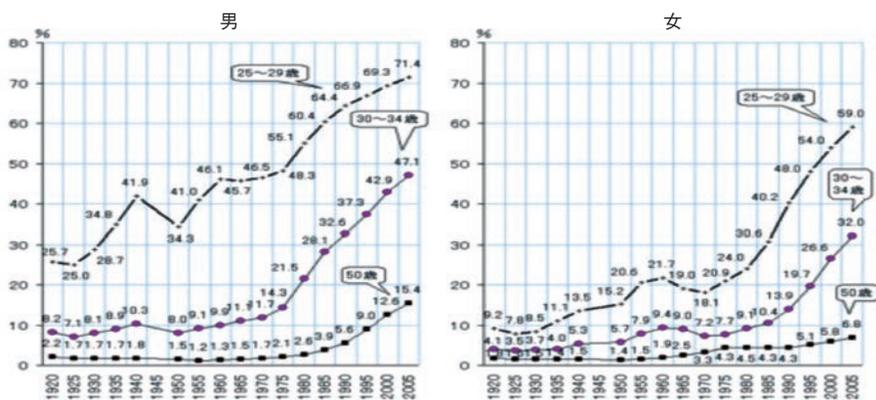


図4 20～64歳人口の65歳以上人口に対する比率



(注) 50歳時の未婚率は「生涯未婚率」と呼ばれる。
 (資料) 国勢調査、人口統計資料集（社会保障・人口問題研究所）

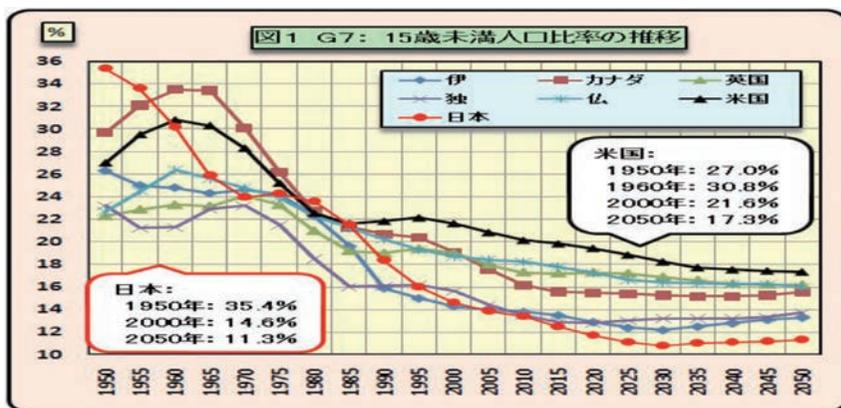


図5 年齢別未婚率と15歳未満人口比率の推移

イタリア、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、日本など、先進諸国といわれている国のなかで、日本が一番子どもの割合が低く、二〇五〇年には子どもは全人口の二・三％です。人口の十人に一人しか子どもがいらないことになります。これから何も対策を講じ

人口減少に対応した経済社会のあり方

なかつたら、二〇五〇年にはこうなるでしょうという予測です。

そのことを危惧して、人口減少に対応した経済社会のあり方を、

経団連が二〇〇八年に提案しました(図6)。項

目別に見てみますと、わが国の人口の展望という

項目には、総人口が減る、働き手が大幅に減少

し、地域偏在化が起こる、高齢化社会がますます

進むといったことが書いてあります。そして、

そのことが経済社会に及ぼす影響として、労働人

口が減っていく、年金の負担が増加し、経済社会

システムがとて厳しくなると書かれています。

それに対する対策として、中長期的な経済社

会の活力維持に向けた方策が提案されています。

第一は成長力の強化で、研究開発活動の促進や、

イノベーション人材の育成と招聘などが挙げられ

ています。第二には、未来世代の育成が挙げられ

ており、少子化対策、子育て支援、教育の再生

と続きます。少子化対策で重要なのは、出生率

の問題で、今日本で一人の女性が生涯に生む子ど

もの数は、一・二と一・三のあいだを前後している

のですが、二以上でないと人口は増えていきませ

ん。今のままでは減るばかりだから、それをなん

とかしましょうということです。最後のポイント

は、経済システムの維持に必要な人材の活用・確



図6 人口減少に対応した経済社会のあり方【概要】

保ということですが。どうしたら生産年齢人口を増やせるのか。そのために、女性の社会進出等の促進、国際的な人材確保競争と日本型移民政策の検討、そして受け入れた外国人の定着の推進が掲げられています。

日本語の行く末に関係する提案

この経団連の提案を日本語に特化して読んでみると次のようになります(図7)。まず、日本型移民政策の検討が提案されています。移民というと、工場で働く人、農漁村で働く人をイメージしますが、ここでいう日本型移民政策では、高度人材を積極的に受け入れていくことが提案されています。つまり、社会の中核的な人材として働いて、税金を払ってくれる人を移民として受け入れましょうということです。そして、受け入れた人々が定着して日本の中核的な存在として自立し、市民としての誇りを持って、エ

日本型移民政策

- 高度人材の積極的受け入れ
- 留学生の受け入れ
- 資格を持つ人材の受け入れ

受け入れた人材の定着推進

- 地域・政府・企業の連携による社会統合政策
- 日本語教育強化
- 相当規模の受け入れ
- 国民のコンセンサス形成が急務

図7 日本語の行く末に関係する提案

ンパワーメントして定着してくれるようにしましょうという事です。その具体的対策の一つが、日本語教育の強化です。

その提案を実行に移して移民を受け入れた場合、日本語社会はどうすればよいのでしょうか(図8)。さきほど、鳥飼先生がグローバル社会で

は日本語も重要だとお話をされましたが、二〇五〇年になって移民を受け入れて社会全体がいつそうグローバル化すると、日本語を母語としない人が増加し、言語少数派グループが増加します。中国語グループ、韓国語・朝鮮語グループ、ポルトガル語グループ、フィリピン語グループなどが増加していきます。

そこで考えなければならぬことは、それぞれのグループ間の共通語としての日本語をどうするかという問題です。と同時に、少数派グループの方々が背景として持っている母語、つまりフィリピン語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語等をどうするかという問題を含めて、国家の言語計画として、どのように日本国内の言語を政策的に管理するかが問題になってきます。

日本社会の言語はどう変わるか？

その場合、日本における言語使用の可能性はどうなるでしょうか(図9)。

可能性の一つは、中国語を母語とする人が多く住んでいる場所では中国語、ポルトガル語人口が多いところではポルトガル語というように、居住地域ごとに異なった言語が使われることです。可能性の二つめとして、複数の公用語を制定することによって国民全体で複数の言葉を使うということも考えられます。たとえば、カナダは二つの公用語を持っていますし、シンガポールやスイスなどは国内に居住する民族的に異なる背景の人たちへの配慮から複数の公用語を持っています。

可能性の三つめとして、日本語が公用語になるということがあります。それと同時に、社会を構成するグループ成員の出身国・地域の言

語使用が保証されるようになるのではないのでしょうか。

そういう時代が来たら、「共通語は当然、日本語だよ」と思っておられる方が非常に多いと思います。当然そうなるだろうという予測が立つということですが、そのことはどのような正当性を持つと言えるのでしょうか。今後の日本は、多様性に基づく社会の構築という観点に立ち、外国出身の民族的少数者が文化的アイデンティティを否定されることなく、対等な構成員として社会に参加し、豊かで活力ある社会の実現を目指すべきだという考え方があります(図10)。

その場合、英語はどうなっているのかという疑問を抱く方がおられるかもしれませんが。それは、国全体の言語政策のなかで考えられていくべき、もう一つのテーマだと思います。

社会統合政策と言語選択

今申し上げたように、可能性一、二、三が考えられますが、可能性一

- 日本語非母語話者の増加
- 言語少数派グループの増加
- 共通語としての日本語の地位
- 少数派グループの母語の保障
- 言語計画・言語政策策定の必要性

図8 人口減少(移民受け入れ)が日本語社会に与える課題

- 可能性(1) 居住地域ごとに異なった言語が使われる。
- 可能性(2) 複数の公用語制定により全員が複数の言語を使う。
- 可能性(3) 日本語が公用語となる。成員の出身国・地域の言語使用が保障される。

図9 日本社会の言語はどう変わる？

今後の日本は、多様性に基づく社会の構築という観点に立ち、外国出身の民族的少数者が文化的アイデンティティを否定されることなく、対等な構成員として社会に参加し、豊かで活力ある社会の実現を目指すべきである(山脇他, 2002)。

図10 可能性(3) 選択の基本となる考え方

- 日本社会を海外からの人材に開放することを無計画に実行すると、複数の単言語社会が併存する可能性が生まれる(ダイグロシア状態)。
- 社会共通の言語を設定することによって、情報収集・発信の機会を均等に保持し、社会に参画することを可能にする。
- 日本に移動する人材が学歴・職歴にみあった社会的地位を確保して日本社会に参画するためには、日本語能力を持つことが重要である。
- そのためには、公的手段による日本事情と日本語のオリエンテーション計画が必要である。

図11 社会統合政策と言語選択

の、日本社会を海外からの人材に開放することを無計画に実行すると、複数の単言語社会が併存する可能性が生まれます(ダイグロシア状態)。そのことによって、世界各地で、言語戦争に端を発する戦闘状態が起こったりしています。そのため、社会共通の言語を設定することによって、情報収集・発信の機会を均等に保証し、社会に参画することを可能にすることが解決策として浮上してきているのではないのでしょうか。

そのとき、公的手段によって、日本社会と日本語のオリエンテーションを、入ってくる人々に対して保証する必要があるでしょう。そのことによって、日本に移動する人材が、学歴、職歴にみあった社会的地位を確保し、日本社会に参画する、そして日本語能力を持つことが可能になるのではないのでしょうか(図11)。

そして、言語権も問題ですが、日本語が公用語になって、日本の社会で法律用語やメディア、教育の用語が日本語になったとしても、そ

他の言語を母語とする人々の言語文化的背景が尊重されないのはおかしいです。そのためには、もともと日本語母語話者である人たちがそれらの言葉を学ぶということももちろんですし、私的な場での言語使用を公的に保証することも同時に考える必要があることだと思えます(図12)。

日本語が公用語になった場合の課題

日本を公用語にして、日本語を共通語として日本国内では使いましょうということになった場合でも、今申し上げた言語的少数グループの言語権は当然保証されなければいけません。そして「正しい日本語」への暗黙の同化圧力を統括することが必要になるでしょう。絶対的に「正しい日本語」を唯一無二の規範として多様性を認めないということは公正ではないということです。具体的には、今の日本で言えば方言の是認といったらよいかもしれません。世代差・性差などの「変種」への寛容性とも言えるでしょう(図13)。さらに、さきほど鳥飼先生がおっしゃったような意味でのやさしい日本語、通じる日本語、つまり、母語の違う人のあいだでも、公用語が互に通じるという条件を満たすことが必要になります。その場合、情報伝達優先の日本語と、美しい日本語、文学の日本語、芸術的日本語というようなものとの関係を再考せざるを得なくなるでしょう。

そのとき、公用語の絶対的条件として、まず情報伝達の機能が優先することを考えると、「以心伝心」とか「あうんの呼吸」というような、「言わなくても通じ合える」ことを最高の伝達と考えることに待ったがかかるだろうということです。

変わらざるを得なくなる？ 日本語の側面

日本語を外から見た場合、不透明だと思われるであろうと予測される点、つまり、国際共通語としての日本語が変わらざるを得なくなるだろうという点を、文の構造の面と運用の面でいくつか書き出してみました(図14)。

まず、命題を包み込む豊かなモダリティです。少し難しいのですが、たとえば、こういうことをいう若者がいたとします。「俺さあ、お前にほれちゃったみたいなんだよな」。これは直裁的に訳せば、「Love you」です。ですが、なんだかオブラートに包まれたというか、奥歯にものが挟まったというか、「ちゃったみたいなんだよな」というところが、曰く言い難くモダリティなのです。伝えたい情報の外にあって、それを情緒的に包み込む部分をモダリティというのですが、日本語はこれがとっても豊かな言語だと言われています。だからこそ日本語は非常に温かい言語だと日本語母語話者同士は考えているのです。けれど外から見るとそこがちよっと理解しがたい部分になります。

そして、「電車がまいります」という例文。これは最近、文化審議会国語分科会が出した敬語の指針のなかで、謙譲語の二に入ります。が、なんで電車が謙譲語になるのということ。謙譲語の一は、自分をへりくださせるということです。謙譲語の二はこの部分で、自分およびその周囲の事柄と思われることを、尊敬する誰かに話すときは自分側の事柄を下げることになるわけです。これも日本語のモダリティです。豊かな情緒的表現、論理式に書き換えられるような情報伝達の骨子の部分(命題)と同じように、豊かに存在する日本語の部

分ということですが。

さきほど、「やり／もらい」の話を迫田先生がしてくださいました。たとえば、「論文の原稿は、〇〇先生が添削しました」というのは、文法的に間違っているわけでも、「正しい日本語」ではないとみんな思いますよね。先生だから「してくださいました」というのをつけたほうがいいということで、これは構造、つまり文法の領域ですが、人間関係がいやおうもなく組み込まれてしまっている部分になります。

次は、「オノマトペ」です。このごろ「がつつり食べよう」という若者が増えています。文化庁国語課のアンケートでは、二〇%から

- 公用語を決定することは、国内に存在する複数の言語を弾圧、あるいは抹殺することを意味しない。公用語法令化の結果、複数の言語母語話者グループのための政策的配慮が、総合的言語計画として必然的に伴わなければならない。

その一つが、「言語権」の保証である。言語権は、自言語の保持・公用語の習得の双方向に適用されるべき権利である。

国家の言語に対する権利

自分の言語に対する権利 (カルヴェ, 2000)

- 公用語の習得は、公的財源を使用し、公的機関によって運営されるべき制度として確立されなければならない。
- そして、付随する諸法規を含め、国の総合的実施計画として立案され、実行されるべきである。

図12 言語権への対応

- 言語少数派グループの言語権保証
- 「正しい日本語」への「暗黙の同化圧力」自制
- 少数派グループの各言語からの転移容認
- 変種への寛容性
- 「やさしい日本語」「通じる日本語」への転換
- 「情報伝達優先の日本語」と「美しい日本語」
- 通用しない「以心伝心」「あうんの呼吸」

図13 日本語が公用語になった場合の課題

文構造の側面

- 「命題」を包み込む豊かな「モダリティ」
「俺さあ、お前にほれちゃったみたいなんだよな」
「電車がまいります」
- 構造に組み込まれている人間関係
「論文の原稿は〇〇先生が添削してくださいました」
- 感性がそのまま語彙になる「オノマトペ」
「なんだかじめじめしてるんです」
「がつつり食べよう」
- 「する」よりも「なる」の文構成
「結婚することになりました」

図14 変わらざるを得なくなる？ 日本語の側面

二五%ほどの国民が使っています。「ガッツリ」、「ジメジメ」、「カラカラ」といった言葉は、感性がそのまま語彙になる表現なので、日本語の母語話者にはピタリと来るのですが、外からは理解しがたく、強いて翻訳しようとしても描写的な表現にならざるを得ないことになりました。

もう一つ、『する』と『なる』の言語学』という本がありますが、外から見ると、日本語の自動詞表現は、主体的であるはずの行動が、あたかも成り行きでそうなってしまったというニュアンスをもっているかのように解釈されてしまうことがあります。「結婚することになりました」って、いったい誰が結婚するわけ？。「主体的に決めたん

じゃなくて、そうなっちゃったわけ？」と思われてしまいますが、日本では「なりました」と言わないと、生意気に聞こえてしまいますよね。「結婚します」とか「結婚するんです」というのは、ちよつと奥ゆかしさを欠く、「おやおや」と思われてしまう言い方ですよ。

コミュニケーション類型の側面

さきほど鳥飼先生もおっしゃったのですが、日本人は分かり合っていることは言わない、いう必要がないほうがよい関係だということが言われます。それから、おしゃべりとか、理屈っぽいのは敬遠されるという、「高文脈」なコミュニケーションパターンを持った言語です。言葉にしなくても伝わると考える部分が多いのを「高文脈」といいます。その反対はドイツ語です。「低文脈」といいます。言わないことは分かり合えない、はっきり口に出し合うほうがよい関係を生むということになります。日本語の場合、聞き手の役割として、常に推測によって話し手の発話意図を理解します。この人はどういうつもりで、こういうことを言っているんだろうか、言われないことにもたくさん意味があるのだと考えて、いつも緊張していなければならぬんです。そして、人間関係の構築においても、「わきまえ」、「気配り」が、日本社会ではとつても大切です。直言居士は、理屈っぽいと同じように、あまり好かれないのではないのでしょうか(図15)。

それから、「自己開示」。自分についてなにを言うかということですが、図16にリストされているようなことです。自分は知っているが、他人は知らない部分を一番大切にするというか、そのことはあえて言わないというような文化です。それから、フラストレーションがたまっているとき、どのように反応をするかを調べた国際的な調査があ

り、日本語社会は「内罰的」だといわれることですが、「雨の日に歩道を歩いていたら、通りがかった車に泥をはねかけられてコートが汚れました。『すみません』と謝罪する運転手に、あなたは何と言いますか」という質問に対して「ほんやり歩いてた私が悪いんです。気にしないでください」と答えるのがこのタイプになります。どうも日本人は、私が悪いんです、私にも落ち度があったのです、というようなことを言いたがるということです。

最後に、「起承転結」の話の展開です(図17)。さきほど鳥飼先生が大切なことを最後にいっておっしゃいました。これが外から見るとどうも分かり難いといわれてしまう表現形式なのです。話の始まりからは言いたいことが見えてこないし、途中で「転」の部分)話が脱線するし、最後まで聞かれないと結論が分からないと言われるのです。因果律ではなく、時系列にそって説明するということです。日本語では、理系の論文でもこういうものが多いらしく、だからノーベル賞がとれなくなるというようなことを心配する人もいます。

どうして日本語が

他にも日本語コミュニケーションの特色は沢山あると思いますが、私たちは、外から見て分かり難い側面を抱えながら日本語をコミュニケーションの媒介語として生きているのだということに自ら気付くことが、これから多文化化していく社会では必要になると思います。自分を客観的に把握する能力をメタ認知能力といいます。心を得ることです。こういうコミュニケーションパターンを持っているのだということを知ったうえで、言語文化的背景の違う人と接触するにはどうしたらよいのでしょうか。要するに伝わるための表現方法を開

- 高文脈 (vs. 低文脈) コミュニケーション
メッセージの全体に占める言語化の量
高文脈コミュニケーション：文脈依存率が高い (典型例は日本語)。
分かり合っていることは言わない。
言う必要がないほうがよい関係 (以心伝心)
「おしゃべり」「理屈っぽい」は敬遠される。
(低文脈コミュニケーション：文脈依存率が低い。典型例はドイツ語)
言わないことは分かり合わない。
はっきり口に出しあうほうがよい関係
聞き手 (読み手) は常に推測によって発話意図を理解する
- ポライトネス
人間関係に配慮したコミュニケーション・パターン
「わかまえ」「気配り」の日本語社会
「直言居士」は敬遠される

図15 コミュニケーション類型の側面

- 自己開示：自分について何を言うか、言わないか
公的自己 ←……………→ 私的自己

| | |
|-------------------|--------------------------|
| 自分も他人も知っている。 | 自分は知っているが他人は知らない。 |
| 他人は知っているが自分は知らない。 | 自分も他人も知らない。 |

- 外罰的 vs. 内罰的反応

雨の日に歩道を歩いていたら、通りかかった車に泥をはねかけられてコートが汚れました。「すみません」と謝罪する運転手に、あなたはなんと言いますか。

外罰的反応：「買ったばかりのコートなんです。弁償してください」
内罰的反応：「ぼんやり歩いていた私が悪いです。気にしないでください」
 無罰的反応：「これで、新しいコートを買う口実ができましたよ」

図16 コミュニケーション類型の側面 (2)

起承転結の表現類型
 導入部分ではトピックが見えない。
 「転」のところで論理が飛躍する。
 重要なポイントは最後にならないと分からない。
 時系列にそった説明 (因果律ではない)

図17 コミュニケーション類型の側面 (3)

発することだと思いません。本日司会をしてくださっている野田尚史先生は、ご著書『なぜ伝わらない、その日本語』で、伝えるための工夫の重要性を説いておられます。日本人同士も伝える努力が必要なのですが、言語的背景の異なる人々とのコミュニケーションで、何が伝わるのか、伝わり難いのかを知るのは一層大切です。そして、そのことと、美しい日本語とは矛盾しないということも認識する必要だと思えます。さきほど「やさしい日本語」という表現ができましたが、この場合の「やさしい日本語」には、曖昧な解釈や、二つ以上の解釈があり得るような情報伝達のしかたを排除して、絶対誤解を招

かないようにするという意味もあると思えます。言葉には、そういった機能的な美しさと、詩の言葉のような芸術的な美しさなど、いろいろな美しさがあつて、それぞれ大切にされなければならぬ文化遺産だと思つていますが、言語的背景を異にする人が集まつて共同で暮らす日本語社会、二〇五〇年を考えた場合、今から心がけてみる必要があります (図18)。

- ・ おしゃべり・議論・討論は美徳だ。沈黙は金ではない。
- ・ 頭の体操のつもりで理屈っぽく語り合おう。
- ・ 伝えたいことは思い切つて口にしてみよう。

- 自分の言葉に関するメタ認知能力を育てる。
- 言語文化的背景の違う人との接触のノウハウを知る。
- 伝わるための表現方法を開発する。
- 言葉には色々な美しさがあることを認識する。

おしゃべり・議論・討論は美德だ。
 頭の体操のつもりで理屈っぽく語り合おう。
 伝えたいことは思いきって口にしてみよう。
 「ここは何も言わないでおこう」は禁句にしよう。
 常に「冷えたアタマ」を維持するように心がけよう。
 相手のコミュニケーション・スタイルを見抜いて対応しよう。
 日本語の優れた使い手になろう。

図18 どうすればよいのか

- ・ 「ここは何も言わないでおく」というのでは、実は何も伝わらない。これは日本国内でも世代間のコミュニケーションの問題として語られています。したがって、「ここは何も言わないでおこう」は禁句にしよう。
 - ・ 常に「冷えたアタマ」を維持するように心がけるようにする。論理的に還元できるような情報伝達ができるという余裕を自分の頭のかなにもつておこうということです。
 - ・ 相手のコミュニケーション・スタイルを見抜いて対応しよう。相手はどういう言語的背景を持つ人なのかによって、自分のコミュニケーション・スタイルを柔軟に変えられるように努力してみよう。
- そのような意味で、日本語の優れた使い手になろうということを提案して、私の話を終わりにしようと思います。(清聴ありがとうございます)

参考文献

- ・ カルヴェ・レイリジャン(西山教行訳) 2000 『言語政策とは何か』 白水社
- ・ 河野稠果 2007 『人口学への招待』 中公新書
- ・ 国立社会保障・人口問題研究所 2007 『日本の将来推計人口』 厚生統計協会
- ・ 日本経済団体連合会 2008 「人口減少に対応した経済社会のあり方」
- ・ 野田尚史 2005 『なぜ伝わらない、その日本語』 岩波書店
- ・ 松谷明彦・藤正巖 2002 『人口減少社会の設計』 中公新書
- ・ 山脇啓造・柏崎千佳子・近藤敦 2002 『社会統合政策の構築に向けて』 明治大学社会科学研究所デイスカッションペーパーシリーズNo.2002-1
- ・ Carroll, T. 2001 Language Planning and Language Change in Japan. Curzon
- ・ Daoust, D. 1997 Language planning and language reform. In F. Coulmas (ed) The Handbook of Sociolinguistics. Blackwell. 436-452
- ・ Spolsky, B. & Shohamy, E. 2000 language practice, language ideology, and language policy. In Lambert & Shohamy (eds.) Language Policy and Pedagogy. John Benjamins 1-41

オラの愛する元気な日本・大好きな日本語

山形弁研究者・タレント

ダニエル・カール

みなさん今日はあーすー。

ご紹介をいただきましたカリフォルニア生まれ、山形育ちのダニエル・カールです。本日は、すごい堅いお話つかし、すごく勉強になる、ためになる話ばつかし、今まであわせて二時間あって、すごく勉強になったとは思いますが、これから三十分はあんまり勉強にならないことを、皆様、ご覚悟をお願いしたいと思います。

でも、やっぱり今国際化時代だからこそ、ちょっとためになる話を考えながらしよーと準備してたんです。

三十年前の日本の現状

今、国際化時代ですよ。よく使われる単語ですけど、ほんとうに国際化されていつてんのかなと思う方もたくさんおられると思うんです。ちょっと二昔と比べてみてください。

オラが初めて日本さきたのは三十五年前です。昭和五十二年です。一年間、奈良県の五條市に住んでました。交換留学生として智辯学園という野球でちょっと有名な高校に一年間留学して、そこで初めて日本語を勉強したわけなんです。最初から方言勉強してたんだ、私は。猛烈な奈良弁だったんです、一年目。

とにかく、今から三十五年も前のことなんですけど、日本はまだ国

際化されてなかったねえー。もう、街歩してるだけで、道路の脇を歩いてるだけで、このへんで運転しているお母さんが私を見て、「うわあー、外国人やわー」とかいつてて、ほんで僕のことばつか見てんですよ。運転しながらですよ。そして、前の車に軽くバツーンってぶつかったんです。そういう経験があるんですよ。なんと三十五年前に日本の田舎、ただ町歩いているだけで、私、脇見事故を起こす力を持っていたんだ。

そのあと二回目の留学は大学生のころで、最初は大阪の関西外国語大学に四か月、その後、京都の二尊院に二か月ホームステイをしてちょっと勉強していたんです。そこは大都会だから外国人けっこういたんですけど、京都の次にすごいところにいきました。佐渡島に流されました。別に悪いことしたわけじゃありませんが、佐渡島の伝統芸能の文弥人形を研究するために渡りました。実際に人形遣いに弟子入りしたんですよ、四か月ばかりは。

佐渡島でのある日の出来事

師匠が八十歳くらいの方で、いろいろ佐渡弁のことも教えていたんだけど、人形のことを習ったわけなんだけど、ある日、突然、先生に用事ができまして、午後一時くらいにでかけなければならなくなっ

た。だから、「ダニエル、今日はここまででいいんだ。あとは自由行動で帰ってよい」といわれたとき、ウォーと思っただんです。

久しぶりに自由になりましたね、何して遊ぼうかなとかいろいろ思っただけ、じゃあ最初は村をちよつと探索すべえと。いろいろ町回ったりしたり、なんというんですか、町の裏つかわのほうにいっぱいあった田んぼ、田園風景を見るのがオラ好きだったんですよ。カリフォルニアでや見えねえ光景だからね。あぜ道を歩きながら、タニシとかいろいろ探したりしていました。オタマジヤクシに足がどれくらい伸びてんだとか、いろいろ探したりしていたんだ。すごーく楽しかったです。ゆつくり、遊びながら。

ところが、気がつかなくなっただけですけれど、オラの後ろにあった農道に、なんと、パトカーがきました。

お巡りさんが、なかに座ったままで、まずサイレンを鳴らすんですよ。エツ、へんな音だなと思って、後ろをみたら、お巡りさんが車から降りて、こう手招きしているのです。

皆さんご存じだと思いますが、外国の方は三か月以上、日本に住んでいる場合、最寄りの役場に行って、身元保証書みていなものをつくらなければなりません。今は運転の免許証のような薄っぺらなものなんだけど、一昔前は、学生手帳みたいなちっちゃい本だったんですよ。そのなかに詳しくいろいろな情報も書かねばならなかった。まず自分の名前、ローマ字、片仮名、家族構造はどうなっているか、本国ではどこで生まれたか、今どこに住んでいるか。それから、日本にきてからどこに住んでいるか、どういうビザできてんのか。指紋も十本全部捺印しなきゃならなかった。本当に細かいこといろいろあって、これつくってもらった後は、外にでるときは必ず身につけて歩きなさい



ダニエル・カール

米国カリフォルニア州モンロビア市出身。

高校時代、交換留学生として奈良県智辯学園に1年間在日。大学生時代、大阪の関西外国語大学に4か月学び、その後、京都の二尊院に2か月ホームステイ、佐渡島で4か月文弥人形遣いの弟子入りをした。米国で大学卒業後、日本に戻り、文部省英語指導主事助手として山形県に赴任し、3年間英語教育に従事した。その後、上京し、セールスマンを経て、翻訳・通訳会社を設立、25年前からテレビ・ラジオ等の仕事を兼務して現在に至る。

主な出演番組は、「Your Japanese Kitchen」(NHK国際2007年4月～)、「ぶらり途中下車の旅」(NTV)、「生活ほっとモーニング」(NHK総合TV)、「どんど晴れ」(NHK総合TV 朝の連続TV小説2007年4月～9月)ほか。

著書は、『ダニエル・カールの国際交流入門』(ぎょうせい、1994年)、『ダニエル先生ヤマガタ体験記』(集英社、2000年)、『オラが心の日本アメリカ』(NHK出版、2001年)、『使える英語はこう学ぶ』CD付(東京書籍、2001年)、『ジャパングリッシュ DAMEDAS 講座—なぜか「英語ツウ」になれちゃう』(東峰書房、2006年)ほか

よと、あっちこちの役場でいわれたんですよ。「これを身につけていなければ逮捕される可能性がある」と、何遍も注意されました。やっぱり怖かったですよね。奈良でもつくったし、大阪でも京都でも、もちろん佐渡島にきてまたつくったんだけど、ただ、ずうっと持ちっぱなしで、だせといわれたのは今回が初めてだったんです。だせているのが、またお巡りさんだから、ちよつとギクツときましたね。

「あれっ、僕の外国人登録書ですか。これです」とだしたら、お巡りさんが「ここで待ってください」といつて、車に戻って無線でえんえんと誰かと話してんだ。「ふおにゃ、ふおにゅ」とかいつて。そして、何遍もオラの証明書についてる写真を見て、オラの顔を見て、写真を見て、オラの顔を見て、ほんとうに本人なのかどうか確かめてんですよ。

警察署にて

しばらくしたら戻ってきて、お巡りさんが「一緒に署にきてください」といつていうんです。「なんでオラが警察署にいがねばなんねえんですか」と聞いたたら、「いいから乗ってください。パトカーに」。そんで、後ろのほうに乗って、ドアを締めた。お巡りさんは車を運転しながら、なんと、ライト照らして、走ったんだ。

「エッ、どうなってんだ。オラ今逮捕された。よくわかんねーな」。後ろのほうでだんだん心配になってんですよ。

警察署について、座り心地の悪い椅子に案内されて、座った。したら、そのお巡りさん消えっちゃまったんですよ。周りに座ってのは、からだのゴツイ警部さんばっかしなんでしゅ。だんだん怖くなってきたんだ。オラどうなってんだーと思って。しばらくしたら、警察署長さんがでてくるんですよ。向かいの椅子に座って、私の登録証を見せていて、

「名前はなんと発音するんだ」

「ダニエル・カールです」

「年はいくつだ」

「十九歳です」

「佐渡島でなにしてんだ」

「人形習ってるだ、ニンギョー、文弥人形です」

「どこに住んでるんだ」

「若林さんのところで下宿させていただいているんです」

「結婚しますか」

質問がだんだんへんになってんだけど、いちおう署長さんが聞いてんだから、素直に答えました。これが十分、十五分くらいずつと続いて、質問されっぱなしで全部素直に答えました。

それで、やっと、質問がなくなつたところで、「署長さん、どうして私を警察署に呼んだんですか」。そしたら、「エエッ、いやーあ。この佐渡島では外国人さんがとつても珍しいものでね、ただ会ってみただけですよ」というんですよ。「もうーう早くいつてくださいいよ。心配するじゃないですか」とかいつたら、「ゴメンゴメン、ゴメンゴメン」。その後、お茶がでてなごやかにいろいろお話ができましたんですが、お茶、二十杯くらい飲みましたね。

わずか三十五年前までのこと。日本はこういう世界だったんですよ。地方では外国人がすごく珍しかったんですね。

山形県下の中・高等学校で

山形県にいったころはまさにそうだった。文部省英語指導主事助手として、山形県で初めての外国人の先生だったんです。史上初の外国人の先生なんです、山形県では。今人数はふえてんですが、昔は各都道府県に一人か二人くらいしかいねーかったんです。オラが山形県ではたった一人の英語指導主事助手でした。だから、仕事がハードですよ。毎日出張して違う市町村に行つて、違う学校で子どもたちに英

語を教えているわけなんです。毎日違う学校で教えるんですよ。中学校、高等学校あわせて二百十校が全部オラのもんだったんだ。だから、毎日私は似たような仕事をしてんだけど、毎日、それぞれの学校では外国人が現れてきたのがいわゆる史上初なんだあー。大騒ぎですよ。まいにち。

典型的な例をいえば、学校の門をくぐってグラウンドを歩いて玄関に向かっているときは、教室から私はまる見えなんです。生徒さんがオラが現れたら、みーんな窓際のほうに走ってくるんです。授業中であろがなんであろが関係ねえんです。みんなウワーツとかくるわけ。窓を開けて上からオラを見て、「おーっ、外国人のせえんせえいが現れたあー」、「本物だー」、「本物だー」とかいたりして。聞こえただけど、私はいちおう、また始まったなあーと。

そのあとは必ず、ほとんど毎日、同じ騒ぎが始まるんですよ。「英語の先生がきたんだから、英語で挨拶したほうがえがんべえ」とかいうんです。そういつていてもみんな恥ずかしがる。「私、英語苦手だからお前こそやんよ」、「オラーもだめだからお前いつてやー」といつたりして、指の差し合いになっていて、大騒ぎになるわけなんです。そのなかから必ず一人がでてくるんですよ。ちょっとだけ心臓に毛の生えている人が。野球チームのキャプテンなんか、生徒会長さんみたいな存在が。

「何、外国人先生がきたつて、あつ、ほんとだ。挨拶わー、えつ、まだ挨拶してねーのんか。だめじゃーん、おめいら。じゃ、オラ英語得意だから、オラが英語で挨拶すつべえつ。みんなよく聞くんだゾー。いくぞー」、「へーい、ディスプレイア ペーン」といつたりするんですよ。まいにちだー。別にペンなんか持つてねーのに。

現在の状況

今はすごい時代です。外国人のせえんせえええは、オラがきてたころは七十人、英語指導助手しかいねかつたんだけど、今四千五百人くらいいるんです。ボンボンボン外国人が増えてきた。おもしろい時代になりました。

ただし、なんつていうんか、皆さんのなかにはいまだにちよつとだけコンプレックス持つていらつしやる方が多いような気がするんだ。外国人の顔を見ただけで、「あつ、英語でしゃべらなければならぬんだー」と思つてしまうことが多いじゃないですか。外国人が対向的に歩いてくるだけで、道をわたつて反対側を歩く方もいらつしやるくらいなもんなんですよ。なんでそうなるのかというと、やつぱり言葉が通じねーえんだ。悪い先入観、皆さん、いまだに持つている方が多いですよ。その古い先入観ちゆうのが、外国人イコール、チンパンカンパン。

でも、今は違うんだ。平成時代は違いますよ。今日本に住んでいる外国人の七割以上の方が、日常生活に困らないほどの日本語力をすでに身につけてんですよ。もちろん人によってバラツキはあります。すごい上手な人もいれば、まあまだ片言の人もいるんだと、ある程度しゃべれるんです。だから、皆さん、その古い先入観、捨ててください。外国人イコール、チンパンカンパンという古い先入観を捨てて、新しい先入観と取り替えてください。入れかーえてください。新しい先入観は、外国人イコール、あるていど日本語がわかるんだあ。これに差し替えていただければ、これからの話は役に立つんです。ちゆうことは、道ばたで、外国人にばつたり出会つた場合は、日本語で

しゃべってもいいんです。だいたいの場合は、オッケーなんです。あんまり問題はねえんだ。

外国人にとっての日本語の落とし穴

ただし、日本語という国の言葉、日本語という国語には、いくつかの落とし穴があるんです。外国人にとって非常にわかりにくい特徴がいくつかあるんです。それをこれから取り上げて皆さんにお教えしたいと思っっているんです。



ままず最初は、この単語を皆さん思い出してください。主語。主語っていうのは、みなさん、英語を勉強なさったとき習いますよね。SVOの英語の順番を覚えて、最初のSがサブジェクト、日本語に訳すと主語。「私は、大阪へ、行きます」という文章だったら、主語は、わかりますよね。「私は」。この文章の主人公が主語になるわけですね。この主語は、外国の言葉にとって、たいへん大切なものなんです。英語でもドイツ語でも、ロシア語もだいたいそうだし、主語は、一つ一つの発言の

なかに必ずいれねばならないもんだとされているんです。それがはいつてないと、だいたいペケになるっていうルールになってるんです。それがだいたい世界共通のところなんだ。

けども、日本語という言葉は、この主語を、使わねえ。できるだけ主語を落として皆さんしゃべるんですよ。長い会話しているとき、冒頭ではそれをいうんかもしんねーけど、そのあとそれを落としてずうっとしゃべり続けるわけです。だから、途中からそれを聞きにはいった人は、誰の話をしてんだかわからないんですよ。それが特徴なんです。この主語がなければ、外国人にはじれつたいんだ。誰の話をしてんかと。毎回いわないと、なあーんか、情報が物足りないよな気がする。

栗山さんの家での出来事

僕が初めてこれにおつかったのは、奈良のときだった。住んでいたのが栗山さんというご家庭でした。栗山さんとこに男の子が二人いたんです。僕の弟になるわけなんですけど、上の弟のミキちゃんが、ある日、玄関で、ある発言をしました。玄関ですからご存じのように、「行つてきまーす」という表現でした。この「行つてきまーす」の、なにか問題だ、と思われるかもしれないんだけど、これは外国人にとってはねえー、考えてもみてください。なんで外国人にわかりにくいかわちゅつたら、行つてきますという表現をそのまま英語に訳してみてください。「go, come」。動詞じゃないじゃないですか、これは。なーんにもついてねーんですよ、情報が。

だからミキちゃんが「行つてきまーす」といったとき、私は思わず聞いてしまいました。「誰が」って。するとミキちゃんが、「ハァー」と

かいうわけなんです。「誰が」と聞かれたら、日本人のほうがとまどうわけ。「誰が」と聞かれて、「あのなあー、ダニエル。誰がっていったら、行つてきますとゆうた人が行くに決まってるだろうが」と。おおう、なるほどなと思つたんだ。

次に聞いたのが、「どこへ」。それもいつていないんだかね。聞いたら、またミキちゃん、「はあーっ。あのなあー、学生服を着てるやろ。学生服着て、行つてきまーすといったら、学校に行つてくるに決まってるやろうが」と。「ほおー、なるほど。服装をみて決めるもんなんだあー」と。

去つたあと、玄関の脇でちよつと考えこんでいて、よおーわからないなと思つていたとき、お父さんがでかけようとしたんだ。お父さんがそこで、「行つてきまーす」といったから、ちよつと意地悪に、「誰があー」って聞いてみたんだ。お父さんが、「俺が俺が」というから、「どこへ」って聞いたら、「はあー、ほら、ネクタイをしつかりしめてるやろー、背広着てるやろー、これから会社だよ」とかいわれたから、やっぱり服装を見て決めるもんだと思つた。

「よーし、これでわかつた」と思つたら、五分後に今度はお母さんがでかけた。お母さんがそこで、「行つてきまーす」といったから、また意地悪に、「誰があー」って聞いて、お母さんが「わたしや、わたし」と。そのあとお母さんの服装を見て、困つてしまいました



あー。いつもの服を着てるじゃあないですか。これじゃあわからなくなって思つて、「お母さん、どこに行くんですか」と聞いたら、お母さんが「ほらほら、ぶらさげているものはなんだかわかるかあー。買い物袋やろー。買い物袋をしょつてでかけるときは買い物しに行つてくるに決まってるやろーが。ダニエルさん、あつたりまえやないか」といわれたんですよ。お母さんがあつたりまえやないかとかいうんだけど、外国人にとつて、じえんじえん当たり前じゃないんですよ。だって、なにもいつてねえんです。動詞しかいつてねえーわけしゆ。何をいつたかという、「go, come」。これだけなんだ。情報がなにもつてない。これは強烈な例なんだけど、日本人のみなさんはこういうところけつこう得意なんです。全部いわなくてもわかるべえーつちゆうところが。これ解をまかせるちゆうところが一つあるんでしゆよ。

以心伝心はテレパシー、外国人には通じない

以心伝心みたいな言葉がたくさんあるんでしゆ。気配りだとか、腹芸、腹探り、察し察すること。ねえつ。顔色をみる。これらを全部英語に翻訳した場合はどうなるかわかる。

テレパシー。これ全部テレパシーなんです。つまり、外国人

の立場からいうと、これ全部超能力になってるわけなんです。日本人のどっか、できが違うんだよな。人の相手の、なんちゅうか、そういうところまで想像できるというのが得意です。みなさん小さいころから練習しているわけなんだから、うまいわけなんです。日本にきて、まだ五年とか十年くらいしかたつてねー人たちには、こういうところはちょっと弱いから、ちょっとだけ、なんというんですか、あわせて、しゃべるときは情報を足してあげてください。「行つてきます」だけじゃなくて、まず最初、「あのな」っていつてくたしやい。注目をひっぱつてから、「私は、これから、学校へ、行つてきます」。「四時ごろ帰りますから、それまで留守番頼むよ」。ここまでしゃべつてくれれば、どんな外国人でも、「がつてんだ」とかいつてくれんだから。こういうところなんです。文法の曖昧なところと、この単語の曖昧なところ。

もつとも誤解されやすい比喩

ほかにも取り上げたい話題が山ほどあるんだけど、オラけつこうおしゃべりだから、もう時間が終わっちゃいましたよ。

簡単におさらいします。氣いつけなければなんないところはいろいろあるんです。比喩的に使われている表現とか、これもまた外国人、混乱してんです。これが日本語のなかで一番すばらしいところでありながら、一番誤解しやすいものなんです。比喩的に使われている、直訳できねえー表現。たとえば、顔が広い。オラ初めて顔が広いと聞いたとき、ビックラしましたね。なんで人の顔の大きさをいうんですか、失礼じゃねえかって思っていました。

あと、お客さんのこと。「あのお客さんしょっちゅうくるんで

うー、いつもくると尻が重い」とかいうんです。誰が計るんですか、そんなもん。ややこしいことたくさんありますよ。

みのもんたさんにも、このあいだへんなのいわれました。コマーシャルのあいだになんかしやべつていて、「デパートについて、ほしいもの見つけた」とかいつてて、僕がちよつと、「えつー、どれくらい欲しかったですかあー」とか聞いたら、「やあー、喉から手がでるほど欲しくなりました」といわれて、「ええつー」と。オラ意味がわからなくて、昼飯に何をくつたんだらうかと。こういう表現は、ほんとうにね。

比喩を使うときのお願い

皆さん勘違いしねーでください。外国人の友だちと話をしてるとき、こういうのを使うなつと、オラ絶対にいわないんです。反対です。バンバン、バンバン使ってください。使つても、これは日本語のミソなんです。こりにこつてやつとできてきた日本語の宝石みてーなものなんです。外国人もこういうの毎日一つか二つくらい覚えるのが趣味だといつてる人がいるわけなんです。だからバンバン、バンバン使ってください。

ただし、一つだけお願いがあるんです。使つたあとにですよ、必ず、説明も入れてください。説明がねえーと、「ええつー、どうなつてんだあー、この会話」つて思われますので、是非ともこういうところも、氣いつけてくんしやい。

ほかにも山ほどあるわけなんです。今度またね、別の講演、あちこちでやっていますので、どうぞよろしくお願ひします。長い時間ご清聴、どうもありがとうございます。

パネルディスカッション

鳥飼玖美子／ダニエル・カール／莫 邦富
西原 鈴子／迫田久美子／野田 尚史（司会）

野田 このパネルディスカッションでは、まず、皆様からいただいたご質問にお答えして、そのあと各先生にそれに付け加えていただくかたちで進めていきます。

なお、本日、ダニエル・カール先生は次のご予定があるということで、ご本人はのんびり構えておられるのですが、マネージャーから必ず四時半にはでられるようにとしつこく言われておりますので、最初



野田尚史

にカール先生にお答えいただきます。では、カール先生お願いします。

趣味の映画を通して語学を学習

カール このあと仕事はいつたよう、時間とか全然意識してなかったんだけど、すいません。質問を二ついただきました。一つは、福田さんからです。「日本人が英語を効率的に学ぶ方法で、お勧めの方法をご教示ください。特にリスニング強化法をお願いします」。よく聞かれる質問です。これやっぱ難しいです。人によって使いやすい教材つてありますよね。いろいろな教材が世の中たくさんあるんだけど、自分にあった教材を選ぶのがとっても大切です。興味のある分野を通じて外国語を勉強するのがベストだと思います。

私も昔、英語指導主事助手やっていたとき、教科書とか見たんです。たとえば、高校生が勉強している英語の文法とかを教えるわけな

んですけど、中身が、たとえば、国連での法律の決め方といった堅い話題とか取り上げて、世の中百人のうち何人の高校生が興味を持つ話だろうか。大学にはいつでも興味を持っている人はまだ少ないと思うんです。できれば、生徒さんたちの趣味、たとえば、サッカーが好きだったらサッカーについての記事とかを通じたほうがいんでねえかなと思います。

また、お勧めできる教材というか勉強する方法は、特にリスニングでしたら、今世の中で便利なのがあります。映画が好きな方でしたらDVD屋さんについて借りてくると、日本語のスーパーだけでなく英語のスーパーもでるんですよ。だから、好きな映画を一つ見つけて、それを借りたり、買ったたりして、何遍も聞きながら文字を見ていて、ときどき文字を消したりとかいろいろすると、なんとというか、好きな映画

だったらやっぱり覚えなくなるんです。台詞一つひとつ。私、子どものころから映画が大好きだから、この方法が僕にとってはベストだったけども、女房はちよつと違うんだ。女房は映画にあんまり興味ねえんだ。でも、女房は音楽が大好きなんだ。

音楽を通してのリスニング、英語学習

山形で生まれて育てられた女房だけど、山形県いや東北六県のなかで一番英語の発音の上手な英語のせえんせえだつたんだ。オラにも教えてねえんですよ。すごつく英語が上手です。なんして上手なのかと。最初、ロシアから来たスパイじゃねえかと思つてたんですけど、聞いてみたら、音楽が好きで、小学生のころからラジオを何気なく聞きながら勉強していたんですつて。日本の音楽も好きだったけども、どちらかというととビートルズとかトム・ジョーンズ、モンキーズなど、その時代の音楽を、ハンハンハンとかやりながら勉強してたわけです。それが自然にというか、いつのまにかかたちになっていった。やっぱり、聞けば聞くほどだんだん意味も知りたくなっ

て、小学校四年生とか五年生のころから独学で英語をNHKのラジオ講座で勉強し始めた。山形の米沢市だから、あまりテレビにそういうのがないし、教科書もそんなにあった時代ではなかったもんだから、NHKに頼るしかなかったんですよ。たぶん、そのとき鳥飼せえんせええじゃなかったんでは。あつ、違うんですか。

とにかく、音楽が好きだったら音楽の歌詞を見ながら一緒に歌ったり、カラオケにいったりとかがいい方法だと思います。発音もうまくなるし、意味もわかるようになります。リズム感も生まれてくるんです。映画が好きだったら映画を利用する。どうしても国連に興味津々だったら国連の本とか読んでてもかまいませんけど、趣味を通じてやるのがオラはお勧めだと思います。

初めて聞いた「グサイ」って、名前？

もう一つ、本川さんからは、「日本語のなかで一番美しい日本語と、一番不愉快だった日本語を教えてください」という質問です。いろいろな日本語の単語のなかで一番美しいのは難しいんですが、たぶん、一番好きな言葉は、「あずましい」です。これは津軽



弁でよく使われたり、山形弁でもある程度使う、「我つましい」と書きます。意味は、「快適、気持ちいい」。お風呂にはいったときに、「あー、あずましーい」とか言ったりします。これが、わがつまと同じように、完璧に何というか、comfortableというような意味で使われていると思います。これが一番いい日本語だとオラは思った。方言だけんど。

一番不愉快だった日本語は、「グサイ」です。この言葉に、オラちよつとひっかかったことがあります。奥さんのことけなすときは、やっぱり「うちのグサイ」とか言ったりしています。これも初めて聞いたのは山形です。

ある日、偉い先生のうちに呼ばれました。すごく緊張してたんだ。上司の上司の上司の上司くらいの人だったんで、すごく緊張しながらも家を訪ねたんだ。そこで、はいったら奥さんもでてきて、こちらの方はもしかして奥さんかなと思って、「あつ、奥さんですか。おばんです」とか言ったら、そのせえんせえいが気がつきまして、初対面だということで、正式に紹介してくれたんです。「これがうちのグサイだ」とか言う



ダニエル・カール

んです。

このとき僕は生まれて初めて聞いた言葉だから、玄関で困ってしまいました。ご挨拶をかわしている真つ最中に、突然、わからない日本語がでてきて、早くなんか言つてフォローしねばならない。玄関で考えこんで、考える時間が〇・五秒くらいしかなかったんだけど、「グサイ、グサイってどういう意味だろう。あつわかった。奥さんのお名前だろう」と思って、僕が、「あつ、グサイさんですか。どうも初めまして」とか挨拶したら、なかにはいっている人たちみんなが大笑いすんです。なんで笑ってんだ、発音が悪いんだろうかなと。

全然意味がわからなくて、そのまま上

がって、その後、お料理とか一品一品奥さんが持ってくるたんびに、私が行儀よくお礼を申し上げます。「あつ、ありがとうございしました、グサイさん」とか言ったりして。下げるときも、「おいしかったですよー、グサイさん」とか言っていたんです。あとで酒がはいって、「クサイチャーん」とかになったりして、言うたびにみんなが大笑いするんですよ。何で笑ってんだべえと、理由はわかんなかったけんど、気になつていて、翌日県庁で『広辞苑』で調べてみたんでしゅ。

あの漢字を見て、オラたまげたーたやなーあ。音読みで「ぐさい」、訓読みで「おろかなつま」と書いてあんです。「馬鹿な妻」つう意味なんです。英語に訳したら「foolish wife」です。アメリカにいつて自分のかみさんのことを人の前で、「foolish wife」なんて言ったら、殴られますよ。「いやー」と思っていたのですが。えらい目にありました。

意味がわかったら、あのせえんせえがなんして自分の奥さんのことを「愚妻」って呼ぶんだ、ひどいんじゃないかと思つたら、その後、何百遍も奥さんのことを「ぐさい

さん」と呼んだのが私でした。恥ずかしくて恥ずかしくてね。そういう不愉快な日本語がありました。

両方とも女房、妻と関係あることですが、ぱっとその二つを思いつきました。山ほどネタはあるんですけども、これくらいでよろしいでしょうか。

野田 ありがとうございます。このあとは、講演の順番で鳥飼先生からお願いします。

「ややつく日本語」の条件とは

鳥飼 たくさんいただいたので全部は無理かと思いますが、似たものをまとめると、「単純日本語、ブロークンな日本語の日本での普及の可能性について」と、「震災で表出した言語の問題について、公共性ある機関などで使われる、ビジュアルを含めての雑劣さが原因の課題としか判じ得ません。日ごろの放送や大手メディア、刊行物にも共通する恣意的サボタージュにも感じられません。打開策は、やさしい日本語では説明不足かと思えます」という趣旨のご質問です。二つともやさしい日本語についてでしたので、少し詳しく説明させていただきます

す。

これは恣意的に単純にブロークンな日本語にするということではありません。じつは、阪神・淡路大震災以来、弘前大学がずっと研究してきたものです。そして、東日本大震災の反省をふまえてもっと早く普及させなければということ、相当に力を入れてガイドラインをつくりました。それは、簡単に言うと、日本の小学校三年生の国語のレベルの日本語で、たとえば、掲示板などに書くことです。難しい言葉は避けて、簡単な単語を使う。基本語彙が二千語。一文は短くする。難しい言葉は避けるのですが、災害時によく使われる言葉、たとえば、「避難所」などは覚えておいたほうがよ



鳥飼美子

いので、「避難所」にルビを振って、かっこをして、（みんなが逃げるところ）というように書いて張ると、読んでわかる、ということ。

それから、カタカナは避ける。カタカナ表記の外来語の由来は、英語が九〇%以上ですが、もとの英語の意味とずれているものがほとんどですので、使うとかえって混乱するので、カタカナ語は使わないようにします。

また、さきほども、「オノマトペ」ができましたが、擬音語のようなものはわからないので避ける。さらに、曖昧な表現は避ける、二重否定は避ける、というようなことです。基本的には、災害があった際に、外国の人たちが読んで何とかわかる、聞いてわかる、そして逃げるができるための日本語です。それを応用してNHKがニュースでの日本語について研究中です。

ですから、これはブロークンな日本語ではありません。じつのところ、日本社会全体に影響を及ぼしてもよいのではないのでしょうか。さきほどの西原先生のご報告でも、これから外国からの人たちが増えてきて、日本が多文化社会、多言語化社会にな

ることを考えると、普通の私たち母語話者がしゃべっている日本語がわかって当たり前ではすまされないうきもありません。そのなかで一番重要なことは、論理的に話すこととでしょう。非常にハイコンテキストで、共有している部分が多い場合には、あうんの呼吸でわかりますが、そうではないことはダニエル・カールさんの話にでてきた通りです。ですから、この人はわからない、この人にはわからせたい、というつもりで丁寧な話をするのが、「やさしい日本語」の理念につながるように思います。

外国人による

「ファンサブ」の流行・発達

もう一つの質問は、「グローバルというのは、人、モノ、金のように国境を越えるものであって、国は国境を越えられるか。それに伴って、国境を越えることができる言葉、越えられない言葉に分けられるのではないか」というものです。普通、国は国境を越えられません、たとえば、EUの試みなどは、限りなくEU圏内で国境をなくして、パスポートもビザもなにもなく、自由に行き来するようにしています。仕事も、

今自分のいるところよりあつちのほうにより仕事がありそうだと思うたら、簡単に移動するという意味では、国家間の国境が、限りなく垣根が低くなる可能性はあると思います。そして、言葉が国境を越えるというの、この言葉は無理、この言葉は越えられるということはありません。どのような言語であっても、今は国境を越えることができます。それはインターネットの発達によりますね。日本語は一つの例としてただけです。日本語はもちろん国境を越えています。

日本というと、世界の若者が一番好きなのは漫画、アニメです。日本の漫画を理解したいから日本語を勉強するという若者たちが、ヨーロッパにも北欧にもアメリカにもたくさんいます。そういう人たちに何人も会いました。好きが高じて日本までやって来る人もいます。

そして今、翻訳の分野で非常に大きな興味をよんでいるのは、「ファンサブ」です。漫画やアニメに字幕がつきますよね。日本の漫画やアニメが好きなたちは、いわゆるプロが訳した翻訳は気に入らないので、インターネットで自分たちでどんどん訳し

て、お互い同士がそれを直していきます。それをファンがつくる字幕(サブタイトル)ということ、ファンサブが大きな分野になりつつあります。

外国語教育の基本とは

もう一つの質問を付け加えます。「小学校からの英語教育に反対の立場のものですが、小中学生などの語学教育の内容を日本文化や社会に特化したものにすれば、日本語に対する造詣も深まり、外国語、他言語の習得も早くなるのではないのでしょうか」。これには私は賛成であり、これだけではないという思いもあります。

なぜかという、それは一見よいのですが、日本文化や社会に特化して英語教育を行うことは、明治時代にも行われました。そして、日本がナショナリズム、国家主義的な方向に向かうときは必ず、日本のよさをアピールするために外国語を学ぼう、英語を学ぼう、日本のよさを英語で発表しようとなってくるんです。しかしこれは、言語とコミュニケーションの関係を考えて場合、半分しかやっていないんですね。言語をグローバル・コミュニケーションに使うと

き一番重要なことは、自分の母語以外の異質な言語に対し理解しようとする心というか、そういう言語があるということに対する気づき、言語的な感性を育てることだと思っています。ですから、小学校、中学校でやるべきことは、ほんとうを言うこと、英語のスキルを教えるのではなく、また、これは英語でどういう言いまわしをするのかということだけに終わるのではなく、日本語と英語なら、英語という言語が、どのように違うのかということ、身近な例から気づかせることです。そうしておいて、小学生のうちに言語のおもしろさと怖さを肌身で感じる、ほんとうの意味での「外国語活動」であってほしいなど。言語に対する意識、感性を育てる一助にすることが、今後の日本人のコミュニケーションにとって必要なことだと思います。自分のよいところを主張することも大事ですが、相手のことを理解しよう、相手の言語もわかるようにすること、これは英語以外の言語についても同じようにしてほしいと思っています。

ほかに質問がありますが、ひとまずここまでにします。

野田 本日はたくさんさんの質問をいただいた

ので、すべてのご質問にお答えする時間がなくて申し訳ございませんが、次の迫田さんに移らせていただきます。

戦前の植民地での

日本語教育はどうなっていたか？

迫田 たくさんさんの質問票を書いてくださり、ありがとうございます。簡単にお答えできるものからお答えしたいと思います。

まず、「在留外国人数の国別の割合が二〇〇八年のグラフでしたが、その後、調査されていないのでしょうか」というご質問です。お国の仕事を疑われるようなことになったので弁明しますと、毎年調査されています。平成二十三年度（二〇二一年）の統



迫田久美子

計では、二百七万八千四百八十人おられ、全体の十九・五%が東京に住んでいます。また、「外国人のための日本語能力検定試験はあるのでしょうか」という質問ですが、試験があります。日本語能力検定試験という試験が毎年行われております。最近、形態がわかりましたが存在しています。

次に、「韓国は、現在漢字を使っていない」とのご指摘がありました。私は韓国を漢字圏に入れていましたが、昔、韓国で漢字が使われていたために漢字圏に含めたのですが、おっしゃる通り、漢字圏からははずすべきですね。失礼しました。

次に、「日本語教師の仕事が認められるようになったのが一九八〇年以降とのことでしたが、戦前の植民地での日本語教育はどうなっていたのですか」というご質問です。もちろん、植民地での日本語教育はありません。ただし、そのときは外国語として日本語を学ぶのではなく、いわゆる同化政策の一つとして、自分たちの国語として教えたので、それは省かせていただきました。しかし、そのときのいろいろな成果、あるいは実践の方法などはその後の日本語教育にも影響を与えています。

また、「もし、グローバルゼーションのことを考えるのであれば、日本人イコール日本語の母語話者とは言えないのではないか。つまり、必ず日本人が日本語母語話者であるということは言えないので、日本人と言わず、日本語母語話者という用語を使ったほうがよいのではないか」というご提案です。私も、そう思います。この点も、これから考えていく必要がある時期がきていると思えました。

「おもしろかったです」は 正用では？

もう一つ、いろいろな誤用例を紹介したとき、『おもしろかったです』というのには、正しいんじゃないですか」というご指摘が、二人の方からありました。これは状況がある程度わかれば、たとえば、すごく楽しそうな顔をしていて、「どうしたの」と聞かれるといった状況があれば、「映画を見にいった、とてもおもしろかったです」のように入ると使えます。しかし、何も状況が明確でない場合、いきなり、「講義、おもしろかったです」と言うのは少し不自然な感じがします。

ちなみに、『おもしろかったです』というのは、ほんとうに正しいのでしょうか」というご質問ですが、「おもしろかったです」というのは、言いにくいかもしれませんが、「おもしろかったですよ」と、後に終助詞がはいったりすると、自然さがでてきます。そのため、私たちが日本語を教えるとき、「おもしろかったです」という言い方は教えますが、実際に使っている場面は、たぶん「よ」とか「ね」を入れて練習します。

ただ、地方によっては、いろいろな言い方があるので、必ずしも正用と誤用の二つでは切り分けられないと思います。

それから、「日本人の使う日本語に乱れがみられる。もつと美しい日本語を話す外国人もいるのではないか。外国人に日本語を教えると同時に、日本人に対する日本語教育も受けさせるべきではないか」というご意見もありました。確かにそう思います。日本語教育は外国の人たちだけのものではなく、私たち日本語母語話者がこれから学ぶべきところも多いと思います。

ご意見やご質問をたくさんいただきましたが、すべてにお答えすることができません。また、非常に考えさせられるご質問も

いただきました。たとえば、「方言の習得などはどのようになっていますか」、「留学・研修以外で来日されている就労者の日本語習得はどのようになっていますか」などです。時間の関係上お答えできませんが、これだけ関心を持っていただいたことに感謝して、私の回答を終えたいと思います。

日本語にわたっての失われた十数年

莫 私には、「中国の北京、上海に住んでいる十五歳から二十五歳くらいまでの若者のなかに、無意識に『オーケー』という言葉を使っている人は何%いますか」という質問がきています。ご質問の意図が私にはわからないのですが、おそらく西洋文化が中国の言語生活にどこまで浸透しているかという意図ではないかと思えます。

結構増えていることは事実です。英語の学習が普及してきているから、留学生、留学経験者が増えているからだけでなく、映画の影響も受けたりして、こういう言葉を使う一種のかっこうよさなどにひかれて使う若者が増えています。割合は、残念ながら国立日本語研究所が私に調査の予算をくれなかったのでまだ調べていません。また、

会社によって、たとえば、ITなどの会社などを訪問すると、会話にバンバン英語がでてきます。

この質問は、さきほどの講演で触れたことにもリンクしますが、日本の魅力をどう表現するのか。さきほど私が強調したことは、私が日本語を学習するのにどれほど苦労してきたか、努力してきたかではありません。昔、日本、日本語には、自然に魅力がありました。私は一生懸命勉強して、この魅力を身につけようとしていたわけです。今は残念ながら、日本は失われた二十年だけでなく、日本語にとっても失われた二十年まではいかににしても、失われた十数



莫 邦富

年とはいえると思います。一例をいいます。

日本語学校が全盛期のとき、ちょうど私の『蛇頭』という本が一番売れていたころ、日本の日本語学校にはいるために、たぶん早く許認可の手続きをすませてビザをだしてもらうため、一部の日本語学校の関係者に、学生がちょっと心遣いを渡していたと思います。今は完全に逆になりました。学生に来てもらうために、学校側が謝礼を払っています。この謝礼の相場は、以前は五万円、やがて七万円、九万円、十二万円、十五万円、今二十五万円にもなっています。一人の学生に来てもらうのに。

そして、『蛇頭』が一番売っていたとき、日本にいる中国人の出身地を見ると、一位は上海、二位は北京、三位は福建でした。一九九九年以降は、一位は黒竜江省、遼寧省、吉林省など東北地域です。そして今、日本語学校に来る学生は、中国の奥地、山西省、寧夏省とかです。とにかく学生に来てもらうためならば、山奥にもいくというような状態になっています。これは何を意味しているか。私が危惧していることは、日本の国としての魅力だけでなく、日本語の魅力も急速に落ちていることです。実際

も落ちているだろうと思います。

一方、さきほど鳥飼先生がおっしゃったように、映画の字幕などの翻訳を自分で進んでやっています。原稿料なんかないわけですよ。著述業をやっている私からみれば、原稿料のない原稿は書けませんと言いたいわけですが、それをみんな競い合っていてやっています。そして、その翻訳を見ると、なかにはすごくうまい訳もあり、ものすごく感心させられるところがあります。一種のアンバランスができてきます。非常に日本語に興味を持ってきている若い人にあつたとき、ものすごく驚くことがあります。日本語は専攻として選んでいないのに、日本語の単語がバンバンでてくるんです。発音も非常によい。しかし、こういった人たちが日本へ上手に引きつけてくるシステムがまだ完全にできていません。

たとえば、日本の専門学校などを見ると、まだ、アニメなどを教えるところが非常に少ない。旧態依然のものを教えている。その意味では、私はここで具体的な「させる、られる、れる、られる」などの問題、文法現象とか言葉の使い方を検討する必要もあります。より重要なのは、日本の魅力を

より系統的に、効果的に、ダイレクトに海外へ伝えられるような体制づくりだと思えます。

なぜ二〇五〇年か

西原 たくさんの質問ありがとうございます。ご質問です。二十一世紀になってから、「これからの半世紀を見通して」といった予測がたくさんでています。二〇五〇年になったらどうなるかという統計資料もできています。二十一世紀を半分経過したという意味でいろいろな資料がお見せできるので、二〇五〇年を選びました。

これからの日本の言語政策とは

また、言語政策に関連していくつか質問をいただいています。外国人研究者が日本の言語政策について評論的に書いた本がいくつかあります。そのなかで、日本の言語政策は、主として日本語そのものを整えるために実施されてきた。たとえば、国語、



西原鈴子

国字、原文一致、また、西欧の学問レベル・技術に追いつくために、それを表現できる近代的な語彙をつくるなどの言語政策は、豊富に立案・実施されてきたが、少数民族の言語問題について、それらの言語と、共通語（標準語）としての日本語のバランスをとる、あるいは総合的に管理するという意味での言語政策は、残念ながら日本政府は行っていないと批判されています。ある言語学者は、言語政策の批判のなかで「日本語母語話者の社会は寄ってたかってアイヌ語を減ぼした。沖縄語を抹殺した」というようなことを述べています。

これからの日本社会が、人口減少に直面するという問題を考えるとき、日本語がど

うなるかを社会問題として考えることは非常に大切だと思います。さきほど二〇五〇年になると一・二人の生産年齢人口で一人の高齢者を支えなければならないという予測を紹介しました。そのことに関する経団連の報告書の概要には現れていませんが、詳しく読んでいくと、日本の生産年齢人口が海外に逃げていくことは、これから起こりうる大きな問題だと書かれています。

今でも海外に生産拠点を移した何万社もの会社があります。これから、ASEANをはじめとするアジア地域、あるいはアメリカ地域まで生産拠点を移そうとしている日本の会社はまだたくさんあります。それに伴って、国内労働人口の流失もあるため、移民というかたちをとって高度人材に来日を勧誘することが考えられているわけです。

人口の高齢化、および生産年齢人口の減少は日本だけの問題ではありません。韓国は既にそのような政策に踏み切っています、中国も一人っ子政策をやめることを検討しているということです。移民を受け入れるのにも競争があります。さきほど日本に魅力がないというお話がありましたが、海外から多くの人が日本に来て働いてくれる気

になってくれるのが大きく疑問視されているところで、これまでのように、「郷に入れば郷に従え」なのだから、日本で働く人は当然日本語を使ってください。日本の商習慣、日本式のコミュニケーションに従ってください、と言っていると、移民獲得競争に負けてしまうことが現実となってくるのが二〇五〇年ごろというわけです。そこでいろいろ考えることとなります。

日本語が公用語になれば、共通語としての性格をはっきり持つこととなります。法律は日本語で書かれる、学校教育は日本語でなされ、メディアも日本語のメディアが中心となることとなります。今の世界のグローバルな人の動きのなかで、移住してくる人が自分の社会文化的背景を捨ててまで日本社会に同化するかというと、そんなことはありません。日本語を大切にするのは当然ですが、あくまで複言語・複文化主義に立ち、彼らを持つてくる言語、文化も大切に、共同して次の日本を創るという考え方が芽をだしています。

そのような考え方を基本的に反映して、外国人労働者問題関係省庁連絡会議が報告書をまとめています。また、日本語教育学

会では、日本語教育に関連して法制化を提案して下さっています。日本の言語政策は、これからは、言語的少数派グループの言語・文化を認めつつ日本語を公用語として共通語にするという点は避けて通れないと思います。

言葉は時代につれて 確実にかわっていく

また、「日本語はどうなっちゃうの」という質問もたくさんいただきました。「自動翻訳機があるんだからそれでいいんじゃないの」というご指摘もありました。確かにそれでいい側面もあると思います。たとえば、科学技術論文のように、書く人の気持ちや、ためらい、慮りが介入しない分野では、自動翻訳機は強力な武器になると思います。しかし、たとえば、言語化していない主語をどう自動翻訳するのか、表現されていないけれど含意されていることを、どうやって自動翻訳できるか。考えるロボットが出現しないかぎりそれは現実的ではないと思います。

さきほどの話のなかで、美しい日本語はいくつ種類があると申しましたが、海外

の人々と一緒に日本語を媒介として生活するとき、今私たちが大切になっている日本語のコミュニケーションがなくなると言っているのではありません。たとえば、「この人頑固だからこの人にはこう話そう」とか、「この人ちょっと物分りが悪いから二度ほど言っておこう」とか、どういう人と対峙しているかによってコミュニケーションの取り方をかえることは、誰でも行っていると思います。そこに、外国から来た人というカテゴリーが一つ加わるわけです。誰でも日常的に行っている対人関係への配慮の、対象となる人々のグループがもう一つ加わるということなのです。そして、私たちが美しいと思う日本語は、なくしてはならないし、なくなることはないと考えております。

それから、「縦書きがとても大切、これこそ日本語」と、思われている方もおられると思います。ただし、このごろは横書きで小説を書く人も現れていますし、学校の教科書が、科目によって横書きにほとんどかわっています。そのようななかで、横書きの文脈と社会の発展、私たちの国語に対する意識が関係して、日本語の書き方も決まっていくのだと思います。

「ら抜き言葉はよくない」と言う人がどれくらいいるかという調査の結果、「けしからん」と言う人が明らかに減ってきているという調査結果がありました。これが二〇五〇年になるとどうなっているのか。言葉は時代につれて徐々にではありますが、確実にかわっていくと思います。以上です。

野田 ありがとうございます。予定の時間を過ぎていますが、最後に本日のお話について一言ずついただければと思います。

鳥飼 日本の社会の今後を考えたとき、今、国語と日本語という話がでしたが、日本語のあり方がかわってくると思います。それをどの程度許容するか、あるいは母語としての日本語、そして、母語としての外国語の存在をどの程度、許容できるかがこれからの日本人にとってのもっとも重要なことではないかと、今日の皆さんのお話を伺いながら考えました。

迫田 今回のフォーラムで、日本語に対して、さまざまな疑問を持ってくださったことが大きな一歩ではないかと思えます。言葉はかわっていきます。ですから、これは正ちよつと言わないんじゃないか、これは正

しいのかなと思われたら、是非その疑問を出发点として、辞書や本を開いてみるといった行動につなげ、学習者と一緒に勉強していただきたいと思います。

莫 国立国語研究所の皆様のご配慮で、私も久しぶりに日本語との一日を過ごさせていただきました。壇上でご来場のみなさんのお顔を見て、感慨深いものがありました。国立国語研究所のやっている、ある意味では難しい話、堅い話ばかりのフォーラムのはずなのに、定員をオーバーしたたくさんの方が応募されたということと、一時から五時までの長時間、そういうところが日本社会のある種の魅力だと思います。こういう勉強をなさっている日本国民の姿に感動しています。リップサービスではありません。ここにご来席の皆様のおかげに、もう年金生活で悠々自適に毎日送ってもいいはずなのに、なぜここにきて、お説教を聞かなければならないのかと思えます。そういうところが逆に、日本のすごいところだと思います。ソフトパワーが、こういうところでもでていると思います。

じつは今夜締め切りのコラムの原稿があります。さきほど、今回の原稿は、こう

いった話題を内容にしようかなあと、ひそかに考えてしまいました。原稿が発表されてから是非読んでみてください。

西原 日本語を母語としない人々を包み込んだ社会で、日本語がどのようになっているのかということについてお話をさせていただきます。それで皆様にお願いが一つあります。思っているけど面と向かって言わないできたことを、口にだしてみただけませんか。お帰りになったら、奥様、旦那様、お子様に、どんなにその方々を愛しているか、その方々をどんなに大切に思っているかを、わかっているんだから言わなくていい、じゃなくて、わかってもらえるためにもう一度言ってみようというところで、試しに口にだしてみよう。それによつてこれからの日本語コミュニケーションの一つのかたちができていくのではないかと思います。よろしくお願ひします。

野田 ありがとうございます。会場の皆様のご協力でよいフォーラムになったと思います。長時間ありがとうございました。

本日は大切な時間に、ここにお集まりくださいましてありがとうございます。最後に、一言お礼を申し上げます。と思います。

このプログラムは、私たち日本語教育研究・情報センターが企画しました。この企画をするとき、どのようなことをキーワードにしようかと考えて、グローバルゼーション、日本語、コミュニケーション、特にコミュニケーション能力を上げようと考えました。それはとても簡単なようで、じつはとても難しい能力だからです。所長のお話の中にもありましたが、新入社員に求められる能力を各企業に聞いたところ、五百二十人の企業マンの八〇%が、「コミュニケーション能力」をあげ、第二位は「主体性」で六二%でした。圧倒的な差をつけてコミュニケーション能力が求められています。

さきほど申し上げましたように、留学生の日本語能力検定試験の内容も、コミュニケーションの運用能力を問う内容が変わってきています。

また、所長がコミュニケーションの語源について述べましたが、私も調べてみて、同じようにラテン語が語源であることがわかりました。所長は「分かち与える」という表現を使いましたが、「共有する、共通する、一般的な」という表現もありました。このなかで私は、「共有する」という言葉を大事なポイントとしてあげたいと思います。つまり、互いに共有すること、つまり外国の方が日本語を学ぶことで、共有する部分が広がっていきます。鳥飼先生は「外国語を学ぶことで窓が開かれる」とお話しされました。カール先生の話でも、お巡りさんに呼び止められてどのように話が展開したのも、彼が日本語を使えたからです。

莫先生とお話したとき、「日本語を学ぶことによって、今までほんやりとしか見えなかったものが、眼鏡をかけて周りがよりはっきり見えるようになった」ということが印象的でした。そして、私たち日本語母語話者も外国人の日本語をもっと理解することによって、いろいろと共有する部分が広がっていくと思います。

そして、西原先生のお話を踏まえると、私たちのこれからの日本語を見つめる視点をかえていかなければならない。つまり、黙っていてもわかる、以心伝心の時代から、上手に話すことが求められる時代へとかわっていくの

ではないでしょうか。そういった意味で、共有する、共有を可能にするためには、私たち自身も変わっていかなくてはならないと思います。

本日のこのフォーラムによって今日のこの出来事を共有しあい、そして、さまざまな日本語を認め、上手な日本語の使い手となるための一歩を踏み出す機会となれば、幸いです。これで、最後の挨拶したいと思います。本当にありがとうございます。

NINJALフォーラムシリーズ 4
国立国語研究所 第6回NINJALフォーラム

グローバル社会における日本語のコミュニケーション
—日本語を学ぶことはなぜ必要か—

2013 (平成25) 年6月28日

発行：人間文化研究機構 国立国語研究所
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
TEL 042-540-4300 FAX 042-540-4333
<http://www.ninjal.ac.jp>

制作：株式会社 クバプロ



国立国語研究所